『福音の回復』　補巻Ⅰ
【「苦しみ」と「苦しみ」の解決】

あいさつ

本書は、『福音の回復』第一巻と第二巻とをつなぐ補巻として書いたものである。第一巻では、「神の福音」には三つのステージがあることを説明したが、ここではそれを新たな視点でまとめ直し、【「苦しみ」と「苦しみ」の解決】という話に置き換えている。

新たな視点とは、“人は「単独者」である”という視点である。ここでの「単独者」とは、人は神の前では一人であり、人の前にも神しかおられないことを言い表している。第一巻では、神が人に一対一で呼びかけ、人も一対一で応答する形で「神の福音」が進むことを説明したが、その際の人の姿を「単独者」と呼ぶ。人は「単独者」なので、神は個別に呼びかけ、人も個別に応答することができるのである。

この「単独者」については、キェルケゴールが『哲学的断片への結びの学問外れな後書』(通称は『後書』) で言い始めた。彼は聖書の教えを通して神と人との関係を学び、それを哲学的に深めて「単独者」として表現した。

例えばキェルケゴールは、創世記 22 章の神とアブラハムとのやり取りから、神が人と一対一で関わることに着目し、人の姿を「単独者」という言葉で表現した。確かに聖書には、「牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します」（ヨハネ 10:3 新改訳 2017）とあり、神は人と一対一で関わることが示されている。

そして、この「単独者」という新たな視点が、20 世紀の神学に大きな影響を与え、近代の実存主義哲学の発展にも貢献した。つまり、人は「単独者」であることの理解は、聖書を深く読み解く上で重要なのである。そこで、第一巻で述べた福音を「単独者」の視点からまとめ直し、第二巻への架け橋とした。

では、「単独者」について少しだけ触れてみたい。人は、神と一対一で向き合って生きる「単独者」である。それはつまり、人は神との関係の中で自分を知り、神との関係を築くようになっているということである。それが人の中心であり、その中心を以て人との関係を築くようになっている。

ところが、アダムの罪に伴い、「死」が入り込んで以来、人には神が見えなくなり、見えるのは人だけになったので、人は神との関係ではなく、人との関係の中で自分を知るようになった。人から少しでも良く思われる関係を築くことが、人の中心になった。その結果、人の言葉で自分の価値を決定するようになったので、人から悪く言われると「苦しみ」を覚えてしまう。それだけではない。人との関係の中で自分を知るようになったことで互いを比べるようになり、これも「苦しみ」となっている。そこで、人は「苦しみ」を解決するために、悪く言った相手を責めたり、少しでも自分の価値を高くしようと自らを誇ったりしてしまう。

しかし、「苦しみ」の真の原因は、人との関係で生じているのではない。なぜなら、人は神の前で一人で生きる「単独者」だからである。人の中心は神との関係であり、その関係が人との関係に投影されるだけなので、「苦しみ」の真の原因は、神との関係によって生じている。神との関係が上手く築かれていかないことに、「苦しみ」の真の原因がある。それゆえ、「苦しみ」の真の解決は、心を神に向け、神との関係を築くこと以外にはあり得ない。それは、神との関係の中で自分を知るということである。人が自分のことをどう言ったかではなく、神が自分のことをどう言っているかで、自分を知るのである。そこにこそ、「苦しみ」の真の解決がある。

人は「単独者」であるという話に少しだけ触れたが、この補巻Ｉでは、第一巻で見た「神の福音」を「単独者」という視点からまとめ直し、【「苦しみ」と「苦しみ」の解決】という話に置き換えている。そして、「単独者」である自分を知る上で重要なのが、聖書が教える「人の造り」である。それを正確に把握できなければ、「単独者」だけでなく、そもそも人の問題も、その解決も曖昧になってしまう。そこで、「人の造り」に関しては第一巻の第一章で詳しく述べているが、ここではそれを簡潔にまとめた。

表記について

聖書の引用は新改訳聖書第三版を使用する。そうでない場合は、その都度聖書訳名を表記する。ただし、聖書箇所の表記は、新改訳聖書第三版の表記を基に本書独自の「略語」を用いる。

―目次―

「苦しみ」と「苦しみ」の解決……4 頁／

－「苦しみ」の原因－……4 頁／

- ❖ 人とは何か……4 頁／
- ❖ 「苦しみ」の真の原因……6 頁／
- ❖ 見える困難に「苦しみ」を覚えるメカニズム……7 頁／
- ❖ 神が覚える「苦しみ」……9 頁／

－心を神に向ける－……12 頁／

- ❖ 「心の声」に聞き従う……12 頁／
- ❖ 心を神に向ける……13 頁／
- ❖ 神が人を引き寄せてくださる……16 頁／
- ❖ 『人格』を所持する……18 頁／
- ❖ 誤った解決……19 頁／

－神と人との関係－……21 頁／

- ❖ 「人の造り」の概要……21 頁／
- ❖ 神と人との関係を掘り下げる……22 頁／
- ❖ 神との関係が上手くいっていない……23 頁／
- ❖ 人は「単独者」である……25 頁／
- ❖ 譬えに見る「単独者」の教え……27 頁／
- ❖ 建物の話……31 頁／
- ❖ 体と器官との関係……33 頁／
- ❖ 「律法」に仕える奴隷……35 頁／
- ❖ 「幸いな人」……37 頁／

－「苦しみ」の解決－……40 頁／

- ❖ 自分の「弱さ」を承認する……40 頁／
- ❖ 「苦しみ」にこそ慰めがある……42 頁／
- ❖ 自分を低くする……44 頁／
- ❖ 誤った道を目指すようになった経緯……46 頁／
- ❖ 「罪の有様」の本質……47 頁／
- ❖ 「肉に属する人」……49 頁／
- ❖ 「不正の富」で友をつくれ……52 頁／

－「神の福音」の視点からの総括－……58 頁／

- ❖ 福音の「三つのステージ」……58 頁／
- ❖ 「三つのステージ」に「苦しみ」の解決を重ねる……59 頁／
- ❖ あとがき……61 頁／

「苦しみ」と「苦しみ」の解決

人はなぜ「苦しみ」を覚えるのか。その原因はどこにあるのか。人は人との関係が困難になると「苦しみ」を覚えるので、「苦しみ」の原因は人間関係にあると思うが、本当にそうなのか。また、人は困難な出来事に直面しても「苦しみ」を覚えるので、「苦しみ」の原因は困難にあると思うが、本当にそうなのか。しかし、そうでなかったのなら、「苦しみ」に対して「的外れ」の対応をすることになる。そこで思い出すのが、アメリカの大統領ジョージ・ワシントンの話である。彼の時代、病気の原因は人の血にあると信じられていたので、病気になると血を抜く治療が行われた。そのため、彼が大統領を辞めて二年後に風邪を引いたときも、主治医は彼の血の半分近くを抜く治療を行い、それが原因で彼は死んでしまった。今では考えられない治療だが、当時は当たり前のように行われていた。これと同じことが、「苦しみ」の原因を見誤ると起きてしまう。そこで、ここでは人の心が覚える「苦しみ」の真の原因を探り、正しい解決を目指す。最初は、「苦しみ」の原因を探るところからである。

－「苦しみ」の原因－

人は、「苦しみ」の原因は見える困難にあると思い込んでいる。困難が自分を苦しめていると思い込んでいる。例えば、親しい人から悪く言われたりすると、その人との関係を築くことは困難になり、「苦しみ」を覚えるので、「苦しみ」の原因は相手にあると思い、怒りを覚える。そこで相手を責め、相手に謝罪させることで困難になった関係を改善し、自分の「苦しみ」を解決しようとする。これが、この世での定番である。しかし、「苦しみ」の原因は、本当に見えるところの困難にあるのだろうか。それを探ってみたい。それには、人とは何かを知る必要がある。

❖ 人とは何か

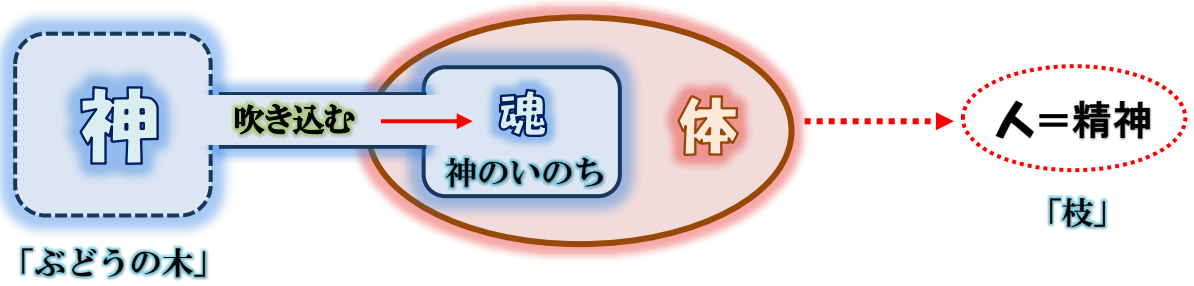
人とは、「体」からの情報を認識し、思考する「精神」（意識）である。「精神」が認識できるのは、変わらない「物差し」に支えられているからである。物差しがなければ、何も認識できない。物差しがあるから、良いとか悪いとかいった判断ができる。また、「精神」が思考できるのは、目的地に向かって動かす「運動」に支えられているからである。目的地に向かって動いていなければ、何も思考できない。目的地に向かって動

いているからこそ、そこに至るにはどうすればよいかと思考ができる。したがって、「精神」が機能するには「物差し」と、目的地に向かう「運動」とに支えられる必要がある。そうでないと、「体」が持ち込む情報を認識し、思考することはできない。

そこで、神は最初に人の体を大地のちりで造り、そこに、「精神」（意識）が機能するために必要な「物差し」と、目的地に向かう「運動」の両方を兼ね備えた「いのち」を吹き込まれた。それによって「精神」が機能するようになり、人は生きるものとなった。その様子が、聖書に次のように綴られている。

> 「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」（創世記 2:7　新改訳 2017）

吹き込まれた「いのち」は三位一体の神の「いのち」なので、ここでの「いのち」は複数形になっている（「ハイイーム」［חַיִּים］）。その「いのち」は「魂」と呼ばれている。つまり、人である「精神」は「魂」と「体」によって機能する。それでイエスは、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」（マタイ 10:28　新共同訳）という言い方をされた。このように、人は神の「いのち」に支えられ、生かされている存在であり、喩えるなら、神がぶどうの木であれば、人は「枝」という関係である。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。



まさしく神が人の土台となり、人は神と連続した者として造られた。そのため、土台の神の「いのち」が提供する「物差し」は「神の思い」であり、その思いが人の向かう目的地になる。その目的地は、一言でいえば「神」である。こうして、神の「いのち」は人に目的地を示し、そこに向かって人を動かしている。これは、神が人に呼びかけ、人をご自分のもとに引き寄せようとしておられることを意味する。

だが、ここに疑問が生じる。人の造りは神と連続性があって「一つ」であるにもかかわらず、なぜ神は人に呼びかけ、人をご自分に引き寄せようとするのかという疑問で

ある。確かに、「人の造り」は神との連続性があるが、神は人に独立した『人格』を与えたため、人の『人格』と神の『人格』との交わりは、「人の造り」の連続性とは別の話となるので、神は人に呼びかけられる。それは、体の連続性がある肉の親と一緒に暮らす家族であっても、心が自動的に通い合うわけではないのと同様である。心が通い合うためには会話が必要である。それで、神は人に呼びかけ、目的地の神に向かって人を動かす運動を展開し、人はそれに答えるという形で、神との会話が行われる。その神からの呼びかけは、神の「いのち」、すなわち「魂」が担当する。「魂」は目的地の神を人に示し、神に向かって人を動かす。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」(詩篇 42:2　新共同訳)。これに人が応答することで、神との距離が縮まり、友と呼ばれる関係になる。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」(ヨハネ 15:15　新共同訳)。ここに、神が人を造られた目的がある。それは、人と友として生きることである。

このように、人とは、神によって生かされ、神に向かって動かされている存在である。

> 「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」(ローマ 11:36　新共同訳)

ここで重要なのは、人は「魂」が展開する運動に押され、「神に向かっている」ということである。これが分かれば、「苦しみ」の真の原因も明らかになる。

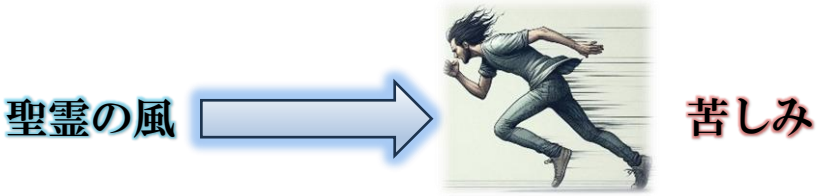
❖ 「苦しみ」の真の原因

人の認識を支え、人の思考を可能にしているのは、神の「いのち」による「魂」である。「魂」は、認識に必要な「神の思い」を発信し、思考に必要な運動を展開する。その運動の目的地を神に定め、人を誘導する。まるでカーナビのように、目的地に到着するまで誘導し続ける。神と人とが友となるまで、正しい道をうしろから語り続ける。

> 「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め」と言うことばを聞く。」(イザヤ 30:21)

この「魂」の働きは、誰にも止められない。そのため、アダムの罪に伴い、「死」が入り込み、神と人との間に「隔ての壁」が出来てしまっても、言い換えれば、神が見え

ない遠い存在になっても、「魂」は「隔ての壁」を人に乗り越えさせ、神と人との距離を縮めようとする。そのようにして、目的地の神を目指して人を動かし続ける。それは、紛れもなく神に向かって人を後ろから押す**聖霊の風**である。であれば、**聖霊の風**に押されているにもかかわらず、心を神に向けずに「的外れ」の方向に進むとどうなるだろう。それは当然、**聖霊の風**に逆らうので、人は「苦しみ」を覚える。

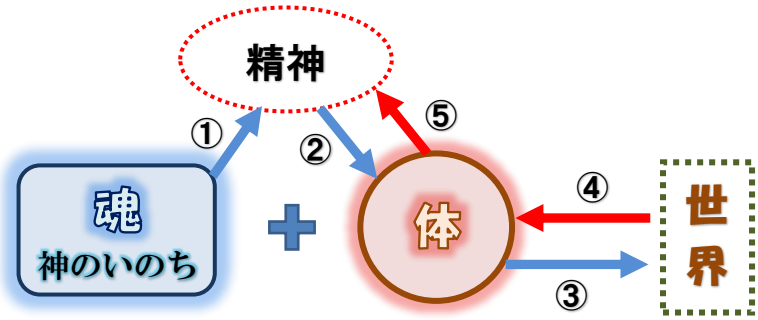


ヨットは、風に押されているときは順風で楽であっても、風に向かって動こうとすれば途端に難航する。人は追い風に乗って歩けば楽だが、向かい風の中を歩けば苦しくなる。これらは自明の理であるように、「魂」からは神に向かって人を動かす**聖霊の風**が吹いているので、その風に逆らい、神とは別のものに向かおうとすれば、人が「苦しみ」を覚えるのは当然のことである。

このように、「苦しみ」の真の原因は、心を神に向けられないことにある。それはつまり、神との距離が縮まらない、ということである。しかし、人は、「苦しみ」の原因は見える困難にあると思い込んでいるので、「的外れ」の対応をしてしまう。そこで次に、「苦しみ」の原因は見える困難にはないことを知ってもらうために、どうして見える困難に人は「苦しみ」を覚えてしまうのか、そのメカニズムを見ておきたい。

❖ 見える困難に「苦しみ」を覚えるメカニズム

神の「いのち」に根ざす「魂」は、神からの情報を「精神」に発信する。それを受けた「精神」は、「体」を通して世界を覗き込み、情報を収集する。すると、「精神」は神を目指させる「魂」の運動に押され、神からの情報を基に世界の情報を統合し、そのことで神を目指そうとするので、そこに認識が起き、思考が始まる。

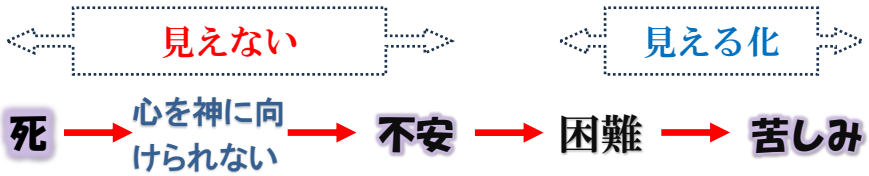


①「魂」は神の「いのち」なので
「神の思い」を「精神」へ発信
②ー③
「精神」は「神の思い」を受け
「体」を通して世界を覗き込む
④ー⑤
「体」は世界の情報を収集し
「精神」に運ぶ→統合（思考）

ところが、神からの情報は「永遠性」であるのに対し、この世界からの情報は「有限性」なので、「永遠性」の情報を否定する。ならば、その「有限性」はどこから来たのかというと、それは悪魔の仕業で人が罪を犯し、その罪に伴い入り込んだ「死」から来た。「**罪によって死が入り**」（ローマ 5:12）。「死」は滅びに向かう運動なので、人の「体」もこの世界も、滅びに向かう「有限性」にしてしまったのである。その結果、神からの情報が「永遠」はあると言っているにもかかわらず、この世界からの情報は「永遠」などないと言うようになり、異なる情報が「精神」に届けられることになった。そのことで、「精神」はどっちつかずの状態になって「不安」を覚えるようになった。「精神」は「永遠」の神に向くことができなくなり、「不安」を感じるようになった。

しかし、感じた「不安」を処理したくても、「不安」の実体は見えない。その実体は、「精神」である人の心が神を向けない状態であるが、それは心の根底（潜在意識）での話なので全く見えない（意識できない）。かといって、「不安」には耐えられないので、「不安」を見える困難に投影し、「不安」の見える化を図り、見える困難を解決することで「不安」を処理しようとする。この「不安」の見える化が、意識できる「**苦しみ**」である。この流れをもう少し説明すると、次のようになる。

入り込んだ「死」によって誕生した「有限性」の世界は、「永遠性」の神を見えなくさせ、心を神に向けられないようにしてしまった。それは**聖霊の風**に逆らっているので、この状態が「**苦しみ**」である。しかし、それは心の谷底（潜在意識）での話なので、「**苦しみ**」を意識することができない。ただ、漠然とした「不安」を感じるだけである。そうであっても、**聖霊の風**は神の方向に吹き続けているので、漠然とした「不安」であろうが人には耐えられない。そこで、人は「不安」を何とかしようと、「不安」を見える困難に投影し、「不安」の見える化を図る。すると、心を神に向けられないことの実体が、心を見える困難に向けたことで具体的な姿となって現れるので、人は漠然とした「不安」を、今度は具体的に意識できるようになる。それが、「**苦しみ**」である。



要するに、「不安」を見える困難に投影すれば、それはそのまま、心を神に向けないことの具体的な実行となるので、すなわち神に向かって人を動かしている**聖霊の風**に逆

らい、「的外れ」の方向に動き出すことになるので、それが意識できる具体的な「苦しみ」になるのである。これを「不安」の意識化という。こうして、心を神に向けられない漠然とした「不安」（潜在意識）は、具体的に見える困難に投影されることで、具体的に意識できる「苦しみ」となる。

以上が、見える困難に「苦しみ」を覚えるメカニズムである。それは、心を神に向けられない「不安」を、見える困難に投影するからである。そして、心を神に向けられない状態は聖霊の風に逆らう「的外れ」の状態なので、聖書は「罪」を言い表すのに、「的外れ」を意味する「ハマルティア」［ἁμαρτία］を使っている。つまり、心を神に向けられない「罪」の意識化が「苦しみ」なのである。

ただし、この話は人の側から見た「苦しみ」を覚える仕組みの話であって、神の側から見た話ではない。大事なのは、神の側から見た話である。人は一人で生きているのではなく、土台の神と一緒に生きているので、神の側から人が覚える「苦しみ」を見ない限り、「苦しみ」の真実は分からない。結論から言うと、人が覚える「苦しみ」は、神が覚える「苦しみ」である。そこで、続けてその話をしたい。

❖ 神が覚える「苦しみ」

「死」が入り込んで以来、人は神と分離し、心を神に向けられずに苦しんでいる。その「苦しみ」は心の谷底（潜在意識）の出来事なので、なぜ苦しんでいるのかまでは意識できない。ただ漠然とした「不安」を感じるだけである。しかし、意識できないからと、心を神に向けられない状態を放置すれば神との和解はなく、そのままでは人は滅んでしまう。そのため、これは非常に危険な状態である。そこで神は、人が意識できない「苦しみ」をご自分が負い、その「苦しみ」を神が覚える「苦しみ」として人に訴える。この訴えが人の心に鳴り響く「心の声」であり、その声が、人が意識できる困難と結びつき、人は困難を意識できる「苦しみ」として感じ取っている。したがって、人が覚える「苦しみ」は、実は、神が覚える「苦しみ」なのである。前項では、人は「不安」を何とかしようと、それを見える困難に投影すると述べたが、それは全て、神がご自分の「苦しみ」を人に訴えるからである。では、なぜそのようなことになるのかを説明したい。

神がぶどうの木であれば、人はその枝である。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。神と人とは、連続した「一つ」の関係になる。そのため、神は当たり前のように人の「苦しみ」を知ることができ、また、それをご自身の「苦し

み」として人の心に訴えることができる。その訴えを、人は見える困難と結びつけることで、意識できる「苦しみ」として感じ取っている。感じ取った「苦しみ」は、まさに人に危険な状態を訴える神の叫びにほかならない。それはちょうど、体が病原菌に冒されて危険な状態になれば、体は「苦しみ」を人に訴え、人を助けようとするのと同じである。つまり、人が苦しむときには、いつも神も「苦しみ」、その愛とあわれみによって人を贖っておられるということである。

> 「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

この話は、癌に喩えると分かりやすい。人は癌になっても最初は自覚が全くないので、その危険性を意識できない。だが、意識できなくても、細胞は癌に冒されている。そのため、意識できないからと、癌を放置すると瞬く間にそれは広がり、人が癌の苦しみを意識できるようになった時には手遅れとなる。そこで医者は、人が意識できない癌を見つけたなら、手遅れになる前に癌の危険性を訴え、手術を勧める。その宣告を受けたなら、人は「苦しみ」を覚えるが、その「苦しみ」を避けては治療には臨めない。神がなさることは、この医者の宣告と全く同じである。そこで、この癌の話に人が意識できない「苦しみ」を重ねてみたい。

人の「苦しみ」の原点は、心を神に向けられない「罪」の状態にある。かといって、その状態は心の谷底での話なので、人はその状態を把握することも意識することもできない。漠然とした「不安」をただ感じるだけである（潜在意識）。ただし、意識できないからと、心を神に向けられない状態を放置すれば、神との和解が成立しないので人は滅んでしまう。そのことを唯一知る神は、手遅れになる前にその危険を人に強く訴え、心を神に向けられるように人を助ける。それが人の意識する「苦しみ」である。こうして、神が人の「罪」（苦しみ）を負い、それをご自分の「苦しみ」として人に訴えるので、人は意識できなかった「苦しみ」を意識できるようになる。そういう意味では、「苦しみ」は神からの励ましであって、人は神を信じる信仰だけでなく、神による「苦しみ」をも賜ったのである。

> 「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

このように、人の覚える「苦しみ」は神が覚える「苦しみ」である。それは、人が意識できない「罪」（苦しみ）を神が負い、神が覚える「苦しみ」として人に訴えている。その訴えが「心の声」であり、その声が意識できる困難に投影され、意識できる「苦しみ」となる。これが「苦しみ」の真実であるが、それを人の側から見ると、人は漠然とした「不安」には耐えられないので、「不安」を見える困難に投影するという話になる。しかし、その際の投影は、神が覚える「苦しみ」を人に訴えているからこそできる。その訴えがあるからこそ、人は「苦しみ」を解決しようと、（見当違いの方法ではあるが）見える困難に「不安」を重ね、見える困難を解決することで「不安」を処理しようとする。それはまるで、自分一人が苦しんでいるように見えるが、実は気がついていないだけで、土台の神も一緒になって苦しんでいるということである。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ」（イザヤ 63:9）。

これは、神が人を真剣に愛しておられるからこそできる。神は人を命懸けで愛するがゆえに、人が意識できない「苦しみ」（罪）を自ら負い、それを人に訴えることができる。まさしく人が覚える「苦しみ」は、人に対する神の愛の証しである。この神の愛の行為を見える形で示したのが、キリストの十字架である。なぜなら、キリストは十字架で人の「罪」（苦しみ）を負い、意識できない「罪」が人を死に至らせることを、自らが死ぬことで人に意識させ、人を助けようとされたからである。そのことで、神が人をどれだけ愛しているか、その事実も明らかにされた。この十字架のおかげで、人は意識できなかった罪の「苦しみ」を意識できるようになり、同時に神の愛も知り、心を神に向けることが可能になった。こうして、キリストの十字架の打ち傷で、人の「苦しみ」は癒やされることになった。

> 「そして自分から十字架の上で、私たちの罪（苦しみ）をその身に負われました。それは、私たちが罪（苦しみ）を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」
>
> （Ⅰペテロ 2:24）　※（　）は筆者が意味を補足

以上の話が、「苦しみ」の原因は、見える困難にあるのではなく、心を神に向けられない状態にあることの説明である。この状態が「罪」である。では、どうすれば心を神に向けられるのだろう。それが、次のテーマになる。

－心を神に向ける－

「苦しみ」の原因は見える困難にあると、誰もが思い込んでいる。そのため、困難を生じさせた相手を憎み、その人さえいなければと考えてしまう。その考えが発展すると、最悪、殺人に至る。実際、イエスによって評判が傷つき、困難に陥った人たちは、イエスを十字架刑で殺してしまった。しかし、それは「的外れ」の解決だったので、イエスは彼らのために祈られた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）。この出来事は、人が「苦しみ」の真の原因を知らないために、「的外れ」の解決に邁進してしまうことを物語っている。この邁進が「罪の有様」である。そこで、「苦しみ」の原因はどこにあるのかを探った結果、心を神に向けられないことにあることが分かった。よって、「苦しみ」の正しい解決は、心を神に向けることにある。ならば、心を神に向けるとはどういうことなのかを考えてみたい。それは、「心の声」に聞き従うということである。

❖ 「心の声」に聞き従う

人を車に喩えるなら、目的地がプリセットされたナビを搭載した車である。ただし、このナビは目的地の変更ができない。そのため、予め定められていた目的地に到達するまで、誤った道に向かうと警告を発し続ける。この警告を「心の声」という。人は「魂」を介して、絶えずこの「心の声」を聞いている。それは、誤った道が修正されるまで警告を発し続ける。人はこの「心の声」を、自分が意識できる困難と結びつけ、意識できる「苦しみ」とするが、その際、「心の声」に聞き従い、正しい目的地に方向を変えれば、「苦しみ」の真の解決が得られる。その目的地は「神」であるため、「心の声」に聞き従って、心を「神」に向けることが「苦しみ」の真の解決となる。

> 「この苦しみのときに、彼らが【主】に向かって叫ぶと（心を神に向けると）、
> 主は彼らを苦悩から救い出された。」（詩篇 107:6）※（　）は筆者が意味を補足

そして、人が覚える「苦しみ」は、先述したように、神が覚える「苦しみ」である。神は人を真剣に愛しているので、人が誤った道に進んで苦しんでいる姿をご覧になると、胸を痛めて、人の苦しみを自分の「苦しみ」として覚えられる。すると、神は覚えた「苦しみ」を人に訴える（心の声）。それは、「危ないから向きを変えよ！」というメッセージである。さらに、神は聖書を通しても、「向きを変えよ」というメッセージを送っている。それは「メタノエオー」［μετανοέω］であるが、日本語の聖書では「悔い改めよ」と訳されている。だが、本来の意味は「向きを変えよ」である。

つまり、神は「心の声」でも、聖書を介しても、「向きを変えよ」と訴えているのである。この訴えを、人は「苦しみ」として感じ取っている。となれば、私たちはキリストを信じる信仰だけでなく、キリストによる「苦しみ」をも賜ったということになる。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです」（ピリピ 1:29）。この賜った「苦しみ」のおかげで、心を神に向けることが可能になった。「苦しみのうちから、私は主を呼び求めた」（詩篇 118:5）。そして、心を神に向ければ、「苦しみ」は真に解決するので、この詩篇の続きには、「【主】は、私に答えて、私を広い所に置かれた」（詩篇 118:5）とある。まことに「苦しみ」は心を神に向けられないことにあるので、心が神に向けば、心のおおいとなっている「苦しみ」は取り除かれていく。

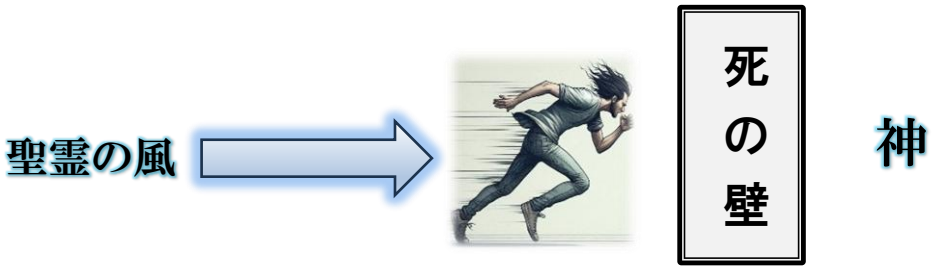
> 「彼らの心にはおおい（苦しみ）が掛かっているのです。しかし、人が主に向くなら、そのおおい（苦しみ）は取り除かれるのです。」
>
> （Ⅱコリント 3:15-16）※（　）は筆者が意味を補足

このように、人が覚える「苦しみ」は、「危ないから向きを変えよ！」という神の訴えであり、危険を知らせる神からの警告である。この警告によって心を神に向ければ、「苦しみ」は真に解決する。人は神と「一つ」となって生きるように造られたので、「彼らがみな一つとなるためです」（ヨハネ 17:21）、心を神に向けることが「苦しみ」の真の解決となる。これを、「心の声」に聞き従うという。それは、「神の言葉」を心の糧として生きることであり、「神の国」とその義を第一に求めることである。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタイ 6:33）。そのようにして、神との距離を縮めることで、「苦しみ」は取り除かれていく。だが、ここに問題があった。何と、自力では心を神に向けられないのである。そこで、心を神に向ける話には続きがある。

❖　心を神に向ける

心を神に向けると、確かに「苦しみ」は解決する。ところが、入り込んだ「死」によって、人は心を神に向けられないのである。人は「死の恐怖」の奴隷となり、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」（ヘブル 2:15）、心を神に向けたくても向けられない中にある。そのため、「魂」からの「心の声」によって、何が良いことで悪いことかが分かっても、良いことの方にハンドルを切ることができない。「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」（ローマ 7:19）。それはまるで、神の方に向かって歩きたくても、目の前に壁が立ちはだかるよ

うである。実際、神の方に向かって歩き出すと「**死の壁**」が立ちはだかり、神に近づくことが全くできない。「**死の壁**」は入り込んだ「死」であり、「死」は、神と人とを分離する「**隔ての壁**」(エペソ 2:14) である。それは、「永遠性」の神を完全に遮る「有限性」の壁であり、この壁がある限り、自力で心を神に向けることは不可能である。



人が歩き回れるのは、「**死の壁**」に囲まれた「有限性」の世界だけである。それが「この世界」であり、その中であれば自由に歩ける。そこで、人は「この世界」の中で神を目指す。正確に言えば、人は神の「**いのち**」である「魂」に押され、神に向かって動いているので、目指す神を無理にでも「この世界」に映し出し、それを神として目指すしかない。その目指す神は、何の欠点も持たない完全な方なので、「この世界」では理想 (完全) が神として心に映し出され、それを神として求めるのである。例えば、ある人は理想の音楽を、ある人は理想の建築を、ある人は理想の容姿を、ある人は理想の社会を、ある人は理想の家族を、ある人は理想の自分を目指す。それによって、神を目指させる「魂」の要請に応えようとする。

しかし、人には神が見えないので、なぜ自分が理想を求めてしまうのかは分からない。それは、神の「いのち」である「魂」に押され (聖霊の風)、自分を造られた創造主を求めているのであるが、そのことには全く以て気づくことができない。そうであっても、これは見えない神を見える形にし、見える神を追い求める話なので、紛れもなく「偶像礼拝」である。

このように、人は「**死の壁**」に囲まれた「有限性」の世界に閉じ込められているので、そこからでは「永遠性」である神に近づくことも、神を見ることもできない。これを「死」の**牢獄**に閉じ込められているという。その**牢獄**の具現化が、実は、人の価値を規定する「律法」である。「死」の**牢獄**に閉じ込められ、心を神に向けられない状態を「罪」というが、「**死のとげは罪**」(Ⅰコリント 15:56)、その「罪」の力は神が見えないことを幸いに、神が規定した人の価値を無視させ、人が勝手に定めた行いの規定の「律法」に人の価値を託させてしまうので、「**罪の力は律法**」(Ⅰコリント 15:56)、「死」の**牢獄**の具現化が「律法」である。

確かに、誰もが「律法」に頼って生きている。「律法」の行いによって少しでも自分の価値を引き上げ、周りから良く思われようとして生きている。ゆえに、誰もが「**律法**」の監督の下に置かれ、閉じ込められている。「**私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていました**」（ガラテヤ 3:23）。これでは、**聖霊の風**に乗って心を神に向け、神との距離を縮めることはできない。心が向くのは、人の価値を規定する「律法」の行いであり、それによって自分が周りからどう思われるかである。「律法」の下にある限り、人は神との距離を縮めることができないので、それは「絶望」でしかない。しかし、「絶望」の中でも一つできることがある。それは、神に助けを求めて叫ぶことである。**牢獄**の中から叫ぶことならできる。というより、「絶望」の中にある自分に気づけば真剣に助けを求め、神のあわれみを乞うようになる。あの収税人のように。

> 「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」（ルカ 18:13）

この叫びが、心を神に向けることなのである。神に叫んだ瞬間、人の心はもう神を向いている。そこでイエスは、神に叫んだ収税人に対し、「**あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました**」（ルカ 18:14）と言われたのであった。

したがって、心を神に向けるというのは、神にあわれみを乞うことである。心を神に向けたくても自力ではどうにもならないので、神にあわれみを乞うことが「心の声」に聞き従い、心を神に向けることになる。それは意識した自分の「**苦しみ**」を神に言い表すことであり、それはそのまま自分の罪を言い表すことを意味する。なぜ「**苦しみ**」を言い表わすことが罪を言い表すことなのかというと、「**苦しみ**」とは心を神に向けられない状態であり、その状態は神の運動に逆らう罪だからである。つまり、罪の意識化が「**苦しみ**」なので、「**苦しみ**」から神にあわれみを乞うことが、神の前で罪を言い表すことになる。すると、神は真実で正しい方なので、その罪を赦してくださる。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

罪が赦されるとは、罪が投げやられるということであり、ここに神との関係が築かれていく。そのことで、「**苦しみ**」という「悪」も取り除かれていくので、「**悪から私たちをきよめてくださいます**」と続く。この一連の流れを、神が人を引き寄せてくださるという。神は、人が神にあわれみを乞うことで、人を引き寄せてくださるのである。

そうでないと、誰も神に近づくことなどできないからである。「父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません」（ヨハネ 6:44）。では、神が人を引き寄せてくださるということを、具体的に見ておきたい。

❖ 神が人を引き寄せてくださる

人を支え動かしているのは神の「いのち」であり、その「いのち」は神を目的地に定め、そこに向かって人を動かしている。人は神の「いのち」に動かされ、神を目指して生きている。そのおかげで認識ができ、思考ができる。しかし、「死の壁」に囲まれた「有限性」の世界が人の前に立ちはだかり、目指す「永遠性」の神のもとには行くことができない。それは、心を神に向けることができないということである。これが人の「苦しみ」の原点であり、この状態は神の働きに逆らっている状態なので「罪」という。「罪」というのは、行為の前に状態を指す。では、どうすれば「死の壁」を越え、神を目指すことができるのだろう。それには、神にあわれみを乞うしかない。神にあわれみを乞えば、神は人を神のもとに引き寄せてくださる。

正確に言えば、聖霊の風が人を後ろから押し、「死の壁」をキリストが壊し、父なる神が引き寄せてくださる。「父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません」（ヨハネ 6:44）。そこでは、三位一体の神が一緒に助けてくださる。ただし、引き寄せられる神がおられる場所は、何と自分の中である。自分の中に、言ってみれば「神の国」の大使館があり、そこが目指す場所となる。なぜなら、人を支え動かしている人の土台は神の「いのち」だからである。人は神から吹き込まれた神の「いのち」を土台とするので、「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）、その神の「いのち」が「神の国」の大使館であり、そこが「神の神殿」（Ⅰコリント 3:16）と同じになる。その「神の神殿」で、人はイエス・キリストと関わることができ、それが三位一体の神との関わりになる。「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）。こうして、「神の神殿」での交わりが再開される。

このように、人の土台は神なので、神は人の土台の神に人を引き寄せられる。そうである以上、人は初めから神に無条件で愛されている者であって、これが人の「真実な姿」である。平たく言えば、人は神と一つ屋根の下で、神に愛されながら暮らしている者である。それが入り込んだ「死」によって、目があっても一緒に暮らす神が見えなくなり、耳があっても神からの生の声が聞こえなくなり、「目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか」（マルコ 8:18）、一緒にいる神に気づけなくなったのである。そこで、それに気づけるようにしてくださるというのが、

神が人を引き寄せてくださるということであり、その神は、すでに人の土台におられるのである。では、神が人を引き寄せる様を時系列で見てみよう。

人は神の部分なので、「私たちはキリストのからだの部分」（エペソ 5:30）、人が意識できない「苦しみ」を神が負い、それを人に訴える。その訴えが「心の声」となって意識できる困難と結びつくので、それが意識できる「苦しみ」となり絶望に追い込まれる。そうなると、神にあわれみを乞うかどうかの選択に迫られる。そこで、神にあわれみを乞う選択をすれば、その最初の選択で土台の神と和解ができ、「死」から「いのち」に移される。「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）。つまり、「永遠のいのち」が与えられる。これを、「人は心に信じて義と認められ」（ローマ 10:10）という。というのも、初めて神にあわれみを乞う選択は、「心の中」（潜在意識）で行われるので、「人は心に信じて義と認められ」となる。そこは潜在意識なので、義と認められ「永遠のいのち」が与えられても、本人には意識がない。意識がなくても、この時点で人は義とされる神の救いにあずかっている。これが、『福音の回復』第一巻で述べた、福音の「第一ステージ」である。さて、時系列の話はまだ続く。

「永遠のいのち」が与えられても、肉体の死までは、人は「有限性」の世界で暮らすので、再び「有限性」の世界に偶像の神を求めてしまい、人は意識できない「苦しみ」に襲われる。そこで神は、人が意識できない「苦しみ」を負い、それを人に訴える。その訴えが再び「心の声」となって意識できる困難と結びつくので、再び人は意識できる「苦しみ」に襲われ、絶望に追い込まれる。その時、再び神にあわれみを乞う選択ができれば、再び神に引き寄せられるので、神との距離はさらに縮まる。縮まれば、キリストについての御言葉を聞くことで、キリストへの信仰を持つようになる。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:7）。こうして、与えられた「永遠のいのち」はイエス・キリストへの信仰となり、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）、「永遠のいのち」を持っていることを知るようになる。「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）。これを繰り返すことで、イエス・キリストとの関係が築かれていき、友と呼ばれるようになる。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ 15:15　新共同訳）。これが、『福音の回復』第一巻で述べた福音の「第二ステージ」である。そして、福音の「第一ステージ」も「第二ステージ」も、絶望に追い込まれることで神にあわれみを乞うことができるので、絶望に追い込まれることが、福音の「第三ステージ」に該当する。

以上が、時系列で見た、神が人を引き寄せてくださる様である。その様は三つのステージに分類でき、それがそのまま第一巻で説明した「神の福音」の実際になる。それは、神が人を「死」から「いのち」に移し、人との距離を縮め、人を神の友と呼ぶようにすることである。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。別の言い方をするなら、それは、神が人に「永遠のいのち」を得させ、その「永遠のいのち」を豊かに持つようにすることである。それで、イエスは次のように言われたのである。

> 「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」
> （ヨハネ 10:10）

そして、目指す神がおられる場所が人の土台である。それゆえ、人は神と和解すると、土台の「神の神殿」（Ⅰコリント 3:16）での交わりが再開される。そこでは、思う存分に神と関わることができる。そのことで、無条件で神に愛されている自分の「真実な姿」を知るようになり、「苦しみ」も解決へと向かう。これを、神が人を引き寄せてくださるという。全ては、人が意識できない滅びに向かう「苦しみ」（罪）を神が負い、それを人に訴えてくれるおかげである。そのおかげで、神にあわれみを乞う応答ができ、自分の「真実な姿」を知ることができる。これは神が呼びかけ、人が応答するという形であり、この応答を「信仰」という。すると人は思う。「信仰」がなくても一方的に神が人を引き寄せてくれればよいのにと。しかし、人は『人格』を所持するので、そうはいかない。

❖ 『人格』を所持する

『人格』とは、徹底した自由である。自分で選べる自由であり、選んだことには責任が伴う自由である。そのため、神は人を後ろから神に向かって押すことはできるが、その聖霊の風を背に帆を開くかどうかは人が選択しなければならない。神は人を、強制的に神に連れて行けるわけではない。もしそうであれば人はロボットであり、そこには『人格』はない。神は人に『人格』を持たせたので、あくまでも人に正しい道を示すだけであり、あとは人がそれを選ぶ必要がある。そこで、神は「魂」を介して「御霊の思い」を語り、それを人が選ぶことで御心の実現を図られる。

> 「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」（ピリピ 2:13）

だが、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人は「肉の思い」も聞くようになった。「肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です」(ローマ 8:6　新改訳 2017)。そのせいで、『人格』の自由は制限され、「御霊の思い」にハンドルが切れなくなった。ここに、人の「苦しみ」の原点がある。

このように、人には『人格』があるので、一方的に神が人を引き寄せることはできない。『人格』がある以上、「苦しみ」を覚えたなら、神にあわれみを乞う決断は、人がしなければならない。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)。この決断が、心を神に向けることであって、ここに「苦しみ」の真の解決がある。しかし、「苦しみ」の原因は見える困難にあると「肉の思い」が訴えるので、人はそれを信じ、『人格』は誤った解決の決断をしてしまう。

❖ 誤った解決

人は、「苦しみ」の原因は見える困難にあると思い込んでいる。本当は、心を神に向けられないことにあるのだが、神が見えなくなる「死」が入り込んだことで生じた「肉の思い」が、「肉の思いは死であり」(ローマ 8:6)、「苦しみ」の原因は見える困難にあると訴えるので、それを信じてしまう。ちなみに、「肉の思いは死であり」の構文は簡単に言うと、「肉の思い（is）死」であり、「肉の思い」の中身は「死」であるという意味であって、「肉の思い」を抱けば「死」に至るという意味ではない。その「肉の思い」は「御霊の思い」を否定するが、例えば「御霊の思い」は「永遠」があると主張し、「肉の思い」は「永遠」などないと否定するが、その否定は「死」に起源があるということである。この「肉の思い」によって、「苦しみ」の原因は見える困難にあると思い、誤った解決の決断をするようになった。

例えば、誰かに悪口を浴びせられると、人は「苦しみ」を覚える。これを、困難に遭うという。すると、その相手を裁くことで、遭遇した困難を解決し、「苦しみ」を排除しようとする。これが、誤った解決の決断である。それは「苦しみ」に対する「的外れ」の治療なので、イエスは、「ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです」(マタイ 5:11) と言い、「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない」(ルカ 6:37　新共同訳) と言われたのである。なぜなら、「苦しみ」の真の原因は、自分が出会った困難にはなく、心を神に向けられない「不安」にあるので、いくら相手を裁いたところで解決しないからである。これでは、「不安」は再び見える困難に投影され、「苦しみ」が生じてしまう。

この誤った解決の決断の話には続きがある。というのも、この「的外れ」の治療では、「苦しみ」が次から次に発生してくるからである。それは切りがないので、そこで今度は、「苦しみ」自体を見ないように、「苦しみ」に蓋をする決断をするようになる。その蓋の代表が、「人から良く思われること」である。人から良く思われ、人から愛されれば愛されるだけ心地よくなるので、それは「苦しみ」を見ないようにする最高の蓋になる。蓋の二番手は、「同情」である。人は「苦しみ」を覚えると周りからの同情を求め、「苦しみ」を見ないようにする。蓋の三番手は、「楽しみ」である。人は「苦しみ」を覚えると何か楽しいことはないかと探し回り、「苦しみ」を見ないようにする。その楽しみは、肉の喜びだけではなく「忙しさ」もある。忙しくすることで、「苦しみ」を見ないようにする。

このように、人は「肉の思い」に惑わされ、「苦しみ」の真の原因を知らないので、誤った解決を決断してしまう。「的外れ」の治療（解決）を目指してしまう。これが「罪の有様」である。その有様に共通するのが、「苦しみ」を神との関係で解決するのではなく、人との関係で解決しようとすることである。しかし、「苦しみ」の真の原因は、心を神に向けることができないことに起因する以上、「苦しみ」の解決は心を神に向け、神との関係を改善することでしか得られない。そこで、心を神に向けるとはどういうことなのかを掘り下げてきた。それは、自分の「苦しみ」を承認し、ただ神にあわれみを乞うことであった。そうすれば、神が私たちを引き寄せてくださるので、それが神との関係改善となり、「苦しみ」も真の解決へと向かう。

これで、「苦しみ」と「苦しみ」の解決の話を閉じたいところだが、未だに「苦しみ」の原因が神との関係にあるという話に懐疑的な人もいるだろう。そうした懐疑は、神が見えなくなる「死」によって生まれた「肉の思い」から来るが、その「肉の思い」に対抗するためにも、見えない神と人との関係をさらに深く掘り下げ、神と人との関係を正確に把握する試みをしてみたい。そうすれば、「苦しみ」の解決が神との関係を改善する以外にはないことが明確になる。そもそも神と人との関係を正確に把握することは、福音理解の肝となるところなので、神と人との関係については丁寧に説明したい。ここから本稿の後半であり、前半の話をさらに深く掘り下げた話となる。

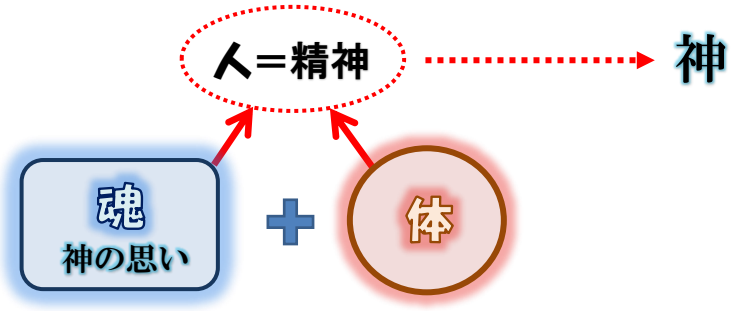
－神と人との関係－

後半は、神と人との関係を掘り下げ、神と人との関係を正確に把握することを目指す。そこから、「苦しみ」の原因を確定させ、改めて「苦しみ」の解決について述べる。まずは、「人の造り」の概要をおさらいするところからである。

❖ 「人の造り」の概要

人とは、「体」からの情報を認識し、それを基に思考する「精神」（意識）である。認識ができるのは（意識が生じるのは）、認識に必要な「物差し」を持っているからであり、それを基に思考ができるのは、その「物差し」が指し示す目的地に向かって動いているからである。目的地がなければ、思考は決してできない。したがって、人である「精神」が機能するには、「物差し」と物差しが指し示す目的地に向かう「運動」が必要になる。そこで神は、認識に必要な「物差し」とその物差しが指し示す目的地に向かって動かす「運動」の両方を兼ね備えた神の「いのち」を、ちりで造った人の「体」に吹き込まれた。それによって「精神」は機能するようになり、人は生きるものとなった。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった」（創世記 2:7　新改訳 2017）。

このように、人は神の「いのち」と「体」に支えられている。神の「いのち」は「魂」と呼ばれ、「魂」が「神の思い」を「精神」に発信し、その思いが認識に必要な物差しとなり、その思いが指し示す神を目的地とし、人を動かしている。そのおかげで、「精神」は「体」が収集する情報を認識でき、それを基に、神を目指して思考ができる。「神の思い」は神の完全性を示すので、完全性を目指して思考ができる。

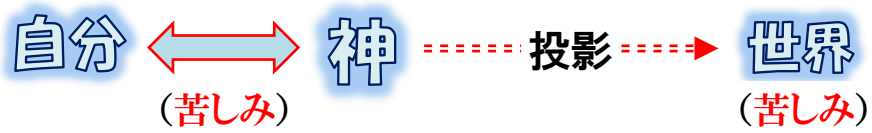


つまり、人の土台は神であり、人は神の中に生き、動き、存在している。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。神を目指して動いている。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2　新共同訳）。神の友と呼ばれることを目指して動いている。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。以

上が、「人の造り」の概要のおさらいである。この概要から、神と人との関係も明確になったので、それ基に、神と人との関係を掘り下げてみたい。

❖ 神と人との関係を掘り下げる

人の土台となる「岩」は、神である。「神こそ、わが岩」（詩篇 62:2）。人は土台の神を目指して動いている。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（詩篇 119:105）。このことから、人は神と向き合った中にあって、目の前にいるのは目指す神だけであることが分かる。「イエスから目を離さないでいなさい」（ヘブル 12:2）。つまり、目標は神であって、人は神を目指して生きるように造られたのである。それゆえ、目標の神から外れることが、すなわち「ハマルティア」[ἁμαρτία] が、「罪」として定められた。それは、神であるイエスを信じないことを意味するので、イエスは、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9　新共同訳）と言われた。このことは、人は神との関係の中で生きていることを意味する。それが人の中心であり、その中心に支えられている者がこの世界で暮らしている。であれば、神との関係から生じた気分が、この世界に投影されることになる。この世界で感じる「苦しみ」は、神との関係で生じた気分の投影となる。



「人の造り」の概要からは、このような神と人との関係の図式が見えてくる。自分の中心は神との関係であり、「わたしの魂よ、沈黙して、ただ神に向かえ。神にのみ、わたしは希望をおいている」（詩篇 62:6　新共同訳）、神との関係がそのまま自分と他者との関係に投影される図式が見えてくる。それでイエスは、「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです」（マタイ 22:37-38）と言い、人を愛するのは第二の戒めだと言われたのである。

そうなると、人にすることは、神にしていることになる。「最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」（マタイ 25:40）。何をするにも、人に対してではなく、神に対してしていることになる。「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」（コロサイ 3:23）。人との交わりが、そのまま神との交わりを意味することになる。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」（Ⅰヨハネ 1:3）。そうであれば、どれだけ人を愛せるかで、ど

れだけ神を愛しているかを知ることができる。「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」（Ⅰヨハネ 4:20）。

このように、神と人との関係を掘り下げれば、自分と神との関係が、そのまま自分と他者との関係に投影されていることが分かる。社会での気分は、神との関係が投影されたものだと分かる。それゆえ、社会で覚える「苦しみ」の解決は、神との関係を改善する以外にはないのである。誰かに「怒り」が湧き、「苦しみ」を覚えたなら、それは神との関係が上手くいっていないからであり、その解決は、神との関係を改善する以外にない。では、人が誰かに「怒り」の「苦しみ」を覚えるとき、その場合、神との関係がどのように上手くいっていないのかも見ておきたい。

❖ 神との関係が上手くいっていない

神の本質は「愛」であり、「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16）、その「愛」の中身はキリストが十字架で明らかにされたように、人の罪を無条件で赦すものである。「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」（マタイ 26:28　新共同訳）。そのため、神は、人の罪を無条件で赦すことで人との関係を築こうとされる。「すべての罪を海の深みに投げ込まれる」（ミカ 7:19　新共同訳）。誰もが心を神に向けられない「罪」の状態にあって、そのことで罪の行為に走ってしまうので、人が自分の罪を言い表し、神がそれを赦すことで、関係を築こうとされる。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

ということは、心を神に向けられない「罪」の状態から不安を覚え、見える安心をむさぼる罪に走ってしまう私たち罪人が、自分には罪がないと言って、罪が赦されるという神の言葉を拒んでしまうとどうなるだろう。それは神を偽り者とすることになり、神との関係を築くための「神の言葉」が、その人の中にはないことになる。

> 「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:10）

これでは、神との関係は上手く築けない。そこでは、自分の罪が赦されたという経験がないので、人の罪を見ても赦せないとなり、「怒り」を覚えてしまう。ならば、神との関係が上手くいくにはどうすればよいのか。それは簡単である。人の側が罪（苦し

み）を神に言い表し、罪を赦す神の愛を素直に受け取ればよい。「子よ。あなたの罪は赦されました」（マルコ 2:5）。そうすれば、神との関係は上手くいく。つまり、多くの罪を赦される経験をすればするだけ、神を多く愛せるようになるというわけである。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（ルカ 7:47　新共同訳）。そうなると、人も愛せるようになる。人の罪を見ても、自分の罪も赦されたのだから赦そうと思えるようになり、「怒り」も生じなくなっていく。まことに、神との関係で生じた、罪が赦される気分が、そのままこの世界に投影されるのである。

このように、人が誰かに「怒り」の「苦しみ」を覚えるときは、その人が神の愛を拒み、神との関係が上手くいってないからである。神の愛は罪を無条件で赦すにもかかわらず、自分には罪がないと言って神の愛を拒むから、神との関係が上手くいかない。そのせいで、人との関係も上手くいかずに「苦しみ」を覚えてしまう。だが、神の愛を素直に受け取り、神に愛されている関係を築ければ（神に愛されている自分に気づけば）、そのまま人を愛せるようになる。あのヘレン・ケラーのように。

まことに神と人との関係が全てであり、神との関係が世界に投影されている。したがって、見える周りの人たちは、神との関係を理解するための映像にすぎない。人は神の前では、一人で生きる「単独者」であって、自分の前には神しかおられないのである。あくまでも人は一人であり、そこには自分を支えてくれている神しかおられない。その証拠に、死ぬときは一人である。ところが、人は映像にすぎない周りの人たちを恐れてしまう。そこで聖書は、「人を恐れるとわなにかかる」（箴言 29:25）と教えている。無論、彼らは「体の命」を奪うことはできる。しかし、それはやがて消えてなくなる肉の体であって、いつまでも残るのは神との関係であり、その関係を司る「魂」に対しては何もできない。そうである以上、恐れなければならないのは神との関係であって、人との関係ではない。イエスは、そのことを次のように言われたのであった。

> 「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ 10:28　新共同訳）

ここでイエスは、神との関係がそのままこの世界に投影されるのであり、人は神の前に一人で生きていることを教えている。神の前にいるのは自分だけであり、自分の前にいるのも神だけであり、人は「単独者」であることを教えている。しかし、人には目の前にいる神が見えないので、神との関係ではなく、人との関係の中で自分を知り

生きようとする。人との関係を改善することで、「苦しみ」を解決しようとする。そこで改めて、人は神の前では一人であり、「単独者」であることを説明したい。

❖ 人は「単独者」である

神が見えないので、人は自分の中心が分からない。分からなくても、人の中心は神であり、神が私を支え動かし、神の中で私は存在している。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。人の中心には神と私だけが存在し、私の前には神しかおられない。神の前には私しかいない。この私の姿を「単独者」という。ところが、人はその様子が見えないので、人との関係の中で自分の価値を知り、それを糧に生きようとする。そこで、人は人にほめられようと善行をする。これでは中心の神との関係は置き去りになり、神との関係が築かれることで得られる報いが、すなわち「苦しみ」の解決が得られない。それで、イエスは次のように言われた。

> 「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。」（マタイ 6:1-2）

このイエスの言葉は、人の中心は神との関係であり、人との関係は、神との関係の投影であることを示している。さらにイエスは、「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」（マタイ 6:3-4）と言い、人は人の前で生きているのではなく、神の前で、一人で生きている「単独者」であることを強調された。そして、こうも言われた。

> 「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」（マタイ 6:6）

これは単刀直入に、あなたの前には神しかいないことを教えている。ゆえに、他者の目を気にせず、神との直接的な関係を持つことを教えている。さらには、こうした神との一対一の関係を、イエスは別の場面でも強調されている。

イエスはあるとき、弟子たちの足を個別に洗った。「**それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた**」（ヨハネ 13:5）。これには、ご自分は人と一対一で関わるのであって、弟子たちを比較し、行いが優秀な者と関わるわけではないことを教える意図があった。それで、イエスは弟子たちの足を差別することなく個別に洗ったのである。ところが、ペテロの順番が来ると、彼は戸惑い、本当に洗ってくださるのかと尋ねた。これに対して、イエスはご自分のすることが今は分からなくても、あとで分かるようになるからと励ましたが、それでもペテロは、「**決して私の足をお洗いにならないでください**」（ヨハネ 13:8）と言って拒んでしまったので、イエスは次のように言われた。

> 「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」
> （ヨハネ 13:8）

これは、神は人と一対一でしか関わらないことを示している。人は神の前では一人であり、目の前にいるのは神だけであることを示している。この姿を「単独者」と呼ぶ。すなわち、人は人との関係の中で生きているのではなく、**その前に**、神との関係の中で生きているということである。このことは、道徳の話からも分かる。

道徳の話とはこうである。神は、人に貸し出した神の「**いのち**」、「魂」を通して「神の思い」を語り、どう生きるべきかを示してくれている。それが道徳の指標になっている。人は絶えず心の奥で道徳の指標を聞かされているので、それに従わないと苦しくなる。例えば、誰かに嘘をつこうとすると、心の中で神の声が鳴り響いて苦しくなる。そのおかげで嘘を思い留まることができ、人を騙さずにすむ。これは、人は人との関係の中で生きているのではなく、**その前に**、神との関係の中で生きていることを示している。神との関係が人の中心であり、その中心を持った者が社会の中で生きているということである。そこで、聖書は次のように教えている。

> 「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」（ローマ 12:2）

「この世と調子を合わせてはいけません」に込められた意味は、あなたの前には神しかおられないので、周りの人が自分のことをどう思うかは気にする必要がないということである。つまり、大事なのは、神が自分のことをどう思っているかである。神は、

「わたしの目には、あなたは高価で尊い」（イザヤ 43:4）と思っている。神は本気で「高価で尊い」と思い、本気で愛している。それゆえ、キリストは十字架の死を以て、その愛が本物であることを明らかにされたのである。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

まことに、あなたは神に良く思われ、愛されている。それを知るなら、そこにはもう「苦しみ」は存在しない。これこそが、「苦しみ」の真の解決である。

このように、人は「単独者」であることを知るなら、すなわち人がどう思うかではなく、神が自分のことをどう思っているかに心が向くなら、そこに「苦しみ」の真の解決がある。したがって、人は「単独者」である自分を知る教えは重要である。そこで、イエスは譬えを通しても、人は「単独者」であることを教えられた。

❖ 譬えに見る「単独者」の教え

イエスは、神と人とが暮らす「神の国」の様子を譬えで話された。その譬えの中には、神と人との関係を教えたものが複数ある。まず、労働者の譬えから見たい。

ある者は朝早くから働き、ある者は九時頃から、またある者は十二時頃から働いた。さらに、ある者は三時頃から働き、最後の者は五時頃から働いた。ところが、彼らが受け取った賃金はみな同じ「一デナリ」だった。すると、朝から働いた者たちが主人に文句を言った。これに対して主人は、あなたと約束したのは「一デナリ」であり、何も不当なことはしていないと言った（マタイ 20:1-16）。この譬えは、誰もが神との関係の中で、一人で生きていることを教えている。それゆえ、周りと自分を比べ、自分の労働時間の長さを訴えても意味がないということである。つまり、人は神の前では一人であって、「単独者」なのである。また、イエスの次の譬えも、神と人との関係を教えている。それは、いなくなった一匹の羊を捜し歩く羊飼いの話である。

> 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。」（ルカ 15:4）

イエスは、羊を一匹なくしたら、他のみんなは放っておいてでもその一匹を捜しに行くと言われた。しかし、この世界は逆である。この世界では、集団に着いていけない者は放っておかれ、人数の多い集団が大切にされる。集団と個人では、集団が優先される。大多数の意見が優先され、個人の意見は無視される。したがって、この世界では、九十九匹を野原に残したまま、たった一匹を捜しに行くようなことはしないのである。九十九匹を犠牲にするよりは、一匹を犠牲にすることが正しいとされる。

しかし、イエスの考えはこれとは正反対である。九十九匹を野原に残し、すなわち集団を放り出して、個人を助けに行くと言われたのである。あくまでも、大切なのは個人であるとされた。これは、神の関心は人間全体ではなく、一人の人であることを物語っている。全体の中であなたを比較し、その優劣であなたと関わろうということではなく、あくまでもあなた個人だけを見て、あなたと関わるということであり、あなただけに関心があるということである。それゆえ、たとえ一匹の羊であっても、命を懸けて捜されるのである。そうであるからこそ、いなくなっていた一匹の羊を見つけたなら喜びが湧き上がると言われたのであった。

> 「ひとりの罪人が心を神に向けるなら、向ける必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」（ルカ 15:7　私訳）

イエスははっきりと、「九十九人の正しい人」の様子を見るよりも、一人の人が心を神に向けられるようになった様子を見る方が喜びであると言われたのである。神の関心は「集団」にではなく、あくまでも「個人」にあり、神の目の前には、あなた一人しかいないということである。それでイエスは、あなたの頭の毛さえも、みな数えられているとまで言い、「あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています」（マタイ 10:30）、また、「牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します」（ヨハネ 10:3　新改訳 2017）とも言うことで、神は人と一対一で関わることを教えられた。

イエスは他にも、神と人との関係を譬えで語られた。それは、放蕩息子の譬えである（ルカ 15:11-32）。この譬えは、前半が放蕩息子の話であり、後半が放蕩息子の兄の話である。前半では、一人の人が心を神に向けられるようになったなら、どれほど神は喜ばれるかを教えている。神の関心は「集団」にではなく、「個人」にあるということである。そして、後半の兄の話は、それをさらに深く説明している。

兄は畑仕事が終わり、疲れて家に向かうと、音楽や踊りの音が聞こえてきたので、何が起きているのかと僕に尋ねた。すると僕は、放蕩していた弟が帰ってきたので、お父上が喜びのあまり、最上の肉を息子に食べさせ、みんなで祝っていると言った。それを聞いた兄は、怒って、家に入ろうともしなかった。「**すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった**」(ルカ 15:28)。この兄の態度を見て、「**それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた**」(ルカ 15:28) とある。父が兄をなだめたのは、兄が弟と自分を比べ、その中で自分の価値を知ろうとしていたからである。しかし、兄は機嫌を直さなかった。父がなだめても耳を貸さず、逆に、自分は真面目に働いてきたのに、放蕩した弟には自分が食べさせてもらったこともない最上の肉を食べさせるのはなぜかと訴えた。徹底的に弟と自分を比較し、自分の方が価値ある者であることを訴えた。すると、父はこう言った。

> 「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」(ルカ 15:31)

ここで、父は、すなわち神は、「おまえはいつも私といっしょにいる」と言われた。この言葉こそ、人は神の前では一人であり、目の前にいるのは神だけであることを教えている。それゆえ、この続きで、神は「私のものは、全部おまえのものだ」と言われた。ここで神は、「**全部**おまえのものだ」と言われたのであって、「**一部**おまえのものだ」と言われたのではない。「**全部**」ということは、神の前には兄一人しかいないということであり、兄が神の全てであることを意味する。もし「**一部**」と言われたのであれば、神の前には大勢いるということになるが、神は「**全部**」と言い、「おまえはいつも私といっしょにいる」と言われた以上、人は神の前では一人であり、目の前にいるのは神だけだということである。

そして、神は放蕩した弟とも同じように、一対一で関わっているので、「**だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか**」(ルカ 15:32) と言い、比較ではなく、個別対応しかしないことを教えられたのであった。

こうして、父は怒る兄に、他の人と自分を比較し、自分の価値を知ろうとするのは誤りであることを教えた。比較することで自分の方が上だと訴え、そのことで褒美をもらい、それによって父との関係を築こうとするのは誤りであることを教えた。これは、

神は人を個別にしか見ていないということであり、この兄のように自分を他者と比較して怒りや嫉妬を覚える全ての人に対する、神からのメッセージである。

イエスは他にも、人の中心は神との関係であり、その関係が周りの人との関係に投影されることを、金持ちとラザロの譬え（ルカ 16:19-31）で話された。金持ちは贅沢に暮らしていたが、ラザロは彼の食べ残しで腹を満たしていた貧しい者であった。二人は死ぬと、ラザロは天に引き上げられ、金持ちはよみに落とされた。ラザロは神との関係を築き、金持ちは神との関係を築いていなかったからである。そこで金持ちは、天にいるアブラハムに、自分の兄弟だけでもよみに落とされないよう、彼らに言い聞かせてほしいと頼んだ。しかし、アブラハムは、彼らには「モーセと預言者との教え」があるので、その教えに耳を傾けないのなら、たとえ誰が死者の中から生き返って、彼らに神の言葉を伝えても、彼らは聞き入れはしないと言った。

> 「アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」（ルカ 16:31）

ここで重要なのは、「モーセと預言者との教え」に耳を傾けない者は、誰がその者に神言葉を語ろうとも、その者は聞かないということである。では、「モーセと預言者との教え」とは、何を指すのだろう。「モーセと預言者との教え」を一言でいえば、それは「神の律法」である。この「神の律法」は人の心に記されているので、「律法の命じる行いが自分の心に記されている」（ローマ 2:15　新改訳 2017）、「モーセと預言者との教え」は、神が人の心に語る「神の言葉」を指す。よって、ここでの意味は、神が人の心に直接語る「神の言葉」に耳を傾けないのであれば、誰が「神の言葉」を語ろうとも、その者は聞き入れないということである。これは非常に分かりやすく、人の中心は神との関係であり、その関係が周りの人との関係に投影されることを教えている。つまり、人は神の前では一人であり、「単独者」であるということである。

このように、イエスは譬えを通しても、人は「単独者」であることを教えている。神の前には、あなたしかいないことを教えている。それゆえ、神は、あなたを周りと比べ、「あなたは劣っている」と断罪することは決してない。むしろ、神はあなただけを見ているので、あなたの限界を見て助けようとされる。そこで、神は「神の思い」を人の心に語り続け、そのことで自分の限界に気づかせ、神に助けを乞わせようとされる。そのことで神はあなたを助け、あなたの神への信仰、希望、愛を育てようとされ

る。それはまるで、イエス・キリストという土台に「神の建物」を建てるかのようである。そこで聖書は、「単独者」の話を建物の話に重ねている。

❖ 建物の話

私を支えているのは、人との関係ではない。神との関係が私を支えている。私の前には神しかいない。その神との関係を知るために、この世界がある。この世界は、神との関係を映し出すスクリーンである。言い換えれば、いつまでも残るものは神との関係で得られるものだけであり、この世界との関係で得られるものは全て消えてしまうということである。それはまるで、見ていた映画のスクリーンに幕が下ろされるようである。よって、私が所持できるのは、神との関係を築くことで得られる、神への信仰、希望、愛しかない。それだけがいつまでも残る。

> 「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」（Ⅰコリント 13:13）

この姿を「単独者」といい、ここでは「単独者」を建物の話に重ねて考えてみる。

建物を建てるには土台が必要である。土台がなければ、何を建てても沈んでしまう。人を建て上げるのも同じである。土台がなければ、人である意識を積み上げることはできない。土台がなければ、人は意識を持った途端、その意識は沈んでしまうので、意識を積み上げていくことができない。人格の形成ができない。何を建てるにも土台は不可欠なのである。人の場合、その土台は神であり、イエス・キリストである。「その土台とはイエス・キリストです」（Ⅰコリント 3:11）。人にはイエス・キリストという不動の土台があるので、その上に意識を積み上げることができ、「過去」と「今」、「未来」を区別できる。しかし、土台がなければ意識は積み上がらないので、そこでの意識は全て「今」であって、「瞬間」であって、「未来」への意識は持ちようがない。

つまり、「過去」、「今」、「未来」の区別ができるということは、いつまでも、同じ土台を持っているということである。その方がイエス・キリストである。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです」（ヘブル 13:8）。では、その土台に何かを建てようと思えば、どうすればよいのか。

無論、土台があれば何でも建てられる。人も、どのような意識でも持つことができる。ただし、そうした建物が崩れないで残るには、建物と土台とをしっかり結びつけ、一

体化させる必要がある。そうでないと、大地震が来れば建物は崩壊し、土台だけになってしまう。したがって、人は神を土台とする以上、崩壊することなく建てられる建物は、神と一体になれるものだけに限定される。それは、神との関係を築くことで得られる意識、すなわち神への信仰、希望、愛しかない。一言でいえば、神を愛する心である。それ以外は、土台の神とは一体にならないので、建てても無駄になる。

すなわち、人との関係を築くことで得られる富の建物は、崩壊するしかないということである。そこでの富は、「金」、「銀」、「宝石」、「木」、「草」、「わら」といった具合にランク付けされるが、どれであっても、それは人と結びつくだけで、土台の神とは結びつかないので、崩壊するしかない。そこで、聖書は次のように教えている。

> 「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。」（Ⅰコリント 3:12-13）

人との関係で苦労して得た「金」、「銀」、「宝石」であっても、苦労せずに得た「木」、「草」、「わら」であっても、そうした建物は何も残らない。確かに、この世界では見ることができても、肉体の死と同時に消えてなくなってしまう。人の土台の神は永遠なる方なので、その上には永遠のもの以外は建てられないのである。ならば、消えてなくなる建物を建てたならどうなるのだろう。その者が、神の呼びかけに応答した者であれば、イエス・キリストという土台は残るので「神の国」には行ける。それはまるで、火の中をくぐるようにして助かる、かのようである。聖書はこうした様子を続けて次のように描写している。

> 「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」（Ⅰコリント 3:13-15）

人との関係で得たものは幻であって、神との関係で得たものだけが残る。そのことは、「その日がそれを明らかにする」のである。その日とは肉体の死であり、それは燃えさかる火となり、土台の神と結びついていない建物を焼き尽くしてしまう（崩壊）。人の土台は神なので、その上には神との関係で築く永遠での建物しか建てられないため、人との関係で築く有限での建物を、肉体の死は焼き尽くす。そのため、人から愛され

る努力をし、「金」、「銀」、「宝石」といった賞賛の建物をいくら建てても無駄になる。それでもキリスト者の場合、土台の神は残るので、「火の中をくぐるようにして」助かりはするが、無駄な生き方はすべきではないというのが、この御言葉の教えである。

要するに、私たちは神の神殿であり、神殿の中では神との関係しか築けないということである。それでこの話の続きに、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか」（Ｉコリント 3:16）と書かれている。

このように、神との関係を築くことで得られる神への信仰、希望、愛の意識しか残らない。神がぶどうの木であれば、人はその枝なので、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）、枝には、ぶどうの木である神との関係に於いて成る実しか残らないということである。このことから、神は何を望んでおられるのかが分かる。それは、大切なあなたと共にいたいということである。運命を共有する、ぶどうの木と枝の関係でいたいということである。それゆえ聖書に、人となって来られた神は、**インマヌエル**と呼ばれるとある。**インマヌエル**とは、「訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である」（マタイ 1:23）。

これは、神は人と一対一で関わるのであって、集団の中の一人として関わるのではないことを意味する。神の関心は「集団」ではなく、あくまでも「個人」であることを意味する。それはなぜなのかと言えば、一人として同じ人はいないからである。誰もが異なる個性を持ち、異なる『人格』を持ち、しかも誰もが神にとっては必要な存在である。そのことを聖書は、体と器官との関係で説明している。

❖ 体と器官との関係

体には様々な器官がある。そうした器官は、どれも異なる働きをし、異なる個性を持っている。体を司る脳は、各器官と個別に向き合い、それぞれの器官が個性を最大限に発揮できるようにする。そうした個性が一つになることで、体は機能する。そこで、

聖書は「体」をキリストに喩え、「体」を構成するために絶対不可欠となる「器官」を人に喩え、神と人との関係を上手く教えている。

> 「確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。（中略） そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。（中略）あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。」（Ⅰコリント 12:14-27）

聖書は、神と人との関係を、あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです」と教えている。つまり、体には数多くの器官があるが、そのどれもが大切なように、神の目には誰もが大切であるということである。さらに言えば、体を構成する器官は、同じ物は一つとしてなく、似たように見えても微妙に異なり、どれも代替えは効かない。例えば、心臓は一つであり、代替えは効かない。手は二つあり似たような器官ではあるが、それでも左右で異なる個性を持っているので、どちらも一つであって代替えは効かない。それだけではない。比較的に弱く見える器官であっても、それがないと体は困るので、かえって大切にする。「それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです」（Ⅰコリント 12:22）。

前途のように、体は各器官と個別に向き合っている。器官は多くあっても、体の前では「単独者」である。同様に、人は神の「体」の「器官」である以上、誰もがなくてはならない大切な一人であって、代替えは効かないということである。それゆえ、神は一人と向き合い、一人を命懸けで愛される。

ここで聖書が教えたいことは、誰もが異なる個性（タラント）を持ち、誰もが異なる『人格』を持ち、誰もが神の目にはただ一つであって、しかも神にとっては必要な存在であるということである。そうであるからこそ、神は人と一対一で関わり、あなたは高価で尊いと言われる。「わたしの目には、あなたは高価で尊い」（イザヤ 43:4）。そして、たった一人しかないあなたが、心を神に向けられるようになったのなら、「神の御使いたちに喜びがわき起こるのです」（ルカ 15:10）とイエスは言われる。そうであるからこそ、イエスは自分のいのちを十字架に捧げてでも、ただ一つの器官であるあなたを助けようとされたのである。

このように、誰もが神の前では「単独者」である。それはちょうど、世界には多くの種類の楽器があり、それぞれ異なる音色を出すが、全てが異なる音色を奏でる楽器で編成されたオーケストラを指揮するようなものである。その場合の指揮者は、個々の楽器と個別に向き合い、それぞれが自分の音を出せるように指導するしかない。彼は、楽器同士を比較することは決してしない。いや、みな異なる音色を奏でる楽器なので、そもそも比較などできない。そこでは、一対一の個別の対応しかできない。

神と人との関係は、これと全く同じである。誰もが異なる音色を奏でる、必要な楽器なのである。だが、そうとも知らずに、私たちは互いの容貌、互いの能力、互いの成果、そうしたものを比べて自分の価値を知ろうとしてしまう。しかし、心を周りの人ではなく神に向け、神との関係の中で自分を知ろうとするなら、自分が持つ楽器を未だ奏でられない私たちの「不足」を神は贖い、自分という楽器を奏でることができるように助けてくださる。そのことで、自分の音色に気づき、神に無条件で愛されている自分を知るようになる。ここに、「苦しみ」の真の解決がある。

これが神と人との関係であり、神の前で人は一人で生きる「単独者」なのである。それゆえ、神と一対一の関係を築くこと以上に大切なものはない。それだけが実存するからである。その実存が、この世界に投影される。したがって、この世界に於ける「苦しみ」の気分は、実存する神との関係の中で生じるのであって、「苦しみ」の解決は、神との関係を改善することでしか得られない。だが、人はそのことを知らないので、神ではなく、人との関係を重要に考え、それを上手く築くことで「苦しみ」の解決を図ろうとする。それはまるで、「律法」に仕える奴隷の姿にほかならない。

❖ 「律法」に仕える奴隷

人は知らない。人は徹頭徹尾、神との関係の中で生きる「単独者」であって、周りとの関係で生きているわけではないということを。周りは、神との関係を投影しているだけであることを知らない。それは、誰もが自分を支えている土台の神が見えないからである。そのため、誰もが周りの人と自分を比べ、その中で自分の価値を知ろうとする。周りよりもましであることが幸いだと思ってしまう。周りから認められ、多くの人から愛される者が「幸いな人」だと思ってしまう。

そこで、誰もが互いを比べ、少しでもましになろうと頑張る。ましになることで、「幸いな人」という賞賛を得ようとする。例えば、子どもは勉強を頑張り、少しでも周りよりも良い成績を取ることで、親の賞賛を得ようとする。その賞賛によって、親との

より良い関係を築こうとする。これに成功すれば、「幸いな人」と呼ばれる。これは親子の間だけに見られるのでなく、ありとあらゆる人と人の関係の中でも見ることができる。そこでは、誰もが互いを比べ、少しでもましであることが「幸いな人」と呼ばれる。少しでも周りから良く思われ、愛されることが「幸いな人」と呼ばれる。そこで、そうした関係を築くことを目指して生きることが「人間的な標準」となった。

この「人間的な標準」は、行いに人の価値を見出し、その価値に応じて報酬が受け取れるというシステムである。そのため、誰もが行いの規定、「律法」に仕える。それはまるで、「律法」の監督の下に閉じ込められた、「私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていました」（ガラテヤ 3:23）、奴隷の姿である。残念だが、その姿に人は気づかないので、「律法」の行いで人を知るように、神も知ろうとしてしまう。神との関係を「律法」の行いで築こうとする。

そこで、パリサイ人は神に、「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します」（ルカ 18:11）と祈り、自分が周りよりもましであることを神に感謝した。さらには、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」（ルカ 18:12）と祈り、自分は「律法」の行いを立派に守っていると証しし、そのことで神との関係を築こうとした。無論、それは誤りであった。なぜなら、あの取税人のように、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と祈り、罪を認める者と神は関係を築かれるからである。つまり、自分を低くする者と関係を築かれる。

これは、イエスの弟子たちも同じであった。彼らも互いを比べ、誰が一番偉いかを競っていた。「さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった」（ルカ 9:46）。どれだけ神の「律法」を行えるかを競い、少しでも周りよりもましになることで神との関係を築こうとした。他者との関係の中で自分の価値を知り、その価値を媒体に神との関係を築こうとした。そこでイエスは、ペテロが他の弟子と自分とを比べていたので、「それがあなたに何のかかわりがありますか」（ヨハネ 21:22）と言われたのである。

このように、人は周りの人と自分を比べ、その中で自分の価値を知ろうとする。周りの人と自分の行いを比べ、行いで自分の価値を知ろうとする。その姿はまるで、行いの規定、「律法」に仕える奴隷である。人は、神との関係の中で生きる「単独者」であることを知らないために、そのようなことになってしまう。いずれにせよ、そこでは

周りから少しでも良く思われることが幸せだと信じられ、それを目指して人との関係を築こうとする。ゆえに、「人間的な標準」では、周りから良く思われる人が「幸いな人」となる。しかし、それは「律法」に仕える奴隷の姿であって、決して「幸いな人」ではない。ならば、「幸いな人」とは誰のことなのだろう。

❖ 「幸いな人」

「幸いな人」とは、神との関係を容易に築ける環境にある人である。その環境、人との関係を上手く築くことができなくなればなるだけ整ってくる。周りから良く思われるのではなく、反対に嫌われ、人との関係の中で幸せを見つけることが困難になればなるだけ整ってくる。平たく言えば、仲間外れになり、一人になればなるほど整ってくる。というのも、そうなると人との関係を築くことが難しくなるので、その分、心を神に向けやすくなり、神との関係を築くのが容易になるからである。それこそが、「神の国」が近くなることを意味するので、その人こそ「幸いな人」である。それでイエスは、「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから」（ルカ 6:20-21）と言われたのである。さらにイエスは、ご自分を信じたことで周りから憎まれ、仲間外れになったのなら、幸いであるとも言われた。

> 「人々があなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。その日には躍り上がって喜びなさい。」（ルカ 6:22-23　新改訳 2017）

そして、イエスは、なぜ仲間外れにされたなら幸いなのか、その理由を、「天においてあなたがたの報いは大きいのですから」（ルカ 6:23　新改訳 2017）と言われた。これは、その者の前にいるのは神だけとなり、神との関係を容易に築くことができ、そうなれば「苦しみ」も真に解決へと向かうということであり、それを「報いは大きい」と言われたのである。まさしく仲間外れになったのなら幸いである。

そこで、イエスは仲間外れになっている者を捜し歩いた。それはまるで、羊飼いがいなくなった一匹を捜し歩くように、である。「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか」（ルカ 15:4）。そして、それを見つけたなら大喜びで寄り添い、「見つけたら、大喜びでその羊をかついで」（ルカ 15:5）、関係を築かれた。例えば、人々から罪人だと後ろ指を指され、仲間外れになっていた取税人や遊女をイエスは捜し出し、大喜びで彼らに寄り添い、福音を語られた。すると、彼らはそれを信じ、神に愛されている自分を知り、神を愛するようになった。こうして、彼らは「神の国」

に入った。逆に、周りからは良く思われ、尊敬されていたパリサイ人は、イエスの福音を聞いても信じなかった。この出来事から、イエスは次のように言われたのである。

> 「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。」（マタイ 21:31）

まことに仲間外れになり、一人になっている人は幸いである。その者は神を容易に受け入れることができ、神の言葉を容易に信じることができるからである。そうなると、神との関係の中で幸せを見つけることができる。それで、イエスは仲間外れにされて一人になっている「幸いな人」を積極的に捜し歩き、寄り添われた。例えば、病気、災い、失敗、能力の劣りといった理由で仲間外れにされた人々をイエスは捜し歩き、彼らに寄り添い関係を築かれた。これが幸いなのである。ただし、神が寄り添おうとしても、それを拒むなら神との関係を築くことはできない。仲間外れにされている人は、確かに神との関係を容易に築けるので「幸いな人」ではあるが、神との関係を築くことを選択しなければ、幸いは得られない。

さて、問題は、仲間外れになることを「幸いな人」ではなく、それは「不幸な人」だと、誰もが思ってしまうことである。嫌われるのは不幸だと思ってしまう。ただ不幸だと思うのではなく、誰もが神からの「心の声」によって罪責感（苦しみ）を持つので、それは罪に対する罰だと思ってしまう。これが問題である。

イエスの弟子たちも、生まれつき目が見えなかったために嫌われ、仲間外れにされていた者を見た時、それは罪に対する罰だと考えた。それでイエスに、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」（ヨハネ 9:2　新共同訳）と尋ねた。しかし、イエスは、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」（ヨハネ 9:3　新共同訳）と言われたのであった。「神の業がこの人に現れる」とは、神との関係が築かれ、「苦しみ」から解放されるということである。つまり、生まれつき目が見えなかったことは不幸の証しではなく、「幸いな人」の証しであったということである。一体誰が、この真実に気づくだろう。

このように、イエスはことあるごとに誰が「幸いな人」であるかを教えられた。それは一言でいえば、『嫌われている人』である。そして、『嫌われている人』になるのは簡単である。キリストの福音を語ればよい。すると、これまでは味方であった家族か

らは嫌われ、彼らは敵となる。「家族の者がその人の敵となります」（マタイ 10:36）。キリストの福音は「光」であり、この世は「闇」なのでそうなる。逆に、キリストの福音を語らないで、『嫌われている人』になることを避けて、「世の友」となることを目指すのであれば、それは自分を神の敵としてしまうのである。「世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです」（ヤコブ 4:4）。

以上が、神と人との関係を知る話であり、聖書は様々な表現を使い、人は「単独者」であることを教えている。人の前には神しかいないことを教え、人は神との関係の中で生きていることを教えている。そして、それが人の中心であることを教えている。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」（使徒 17:28）

この御言葉にもあるように、人の中心は神との関係である。ゆえに聖書は、「神に近づきなさい」（ヤコブ 4:8）と教える。

さらに言えば、人の中心は神との関係であるということは、神が「神の思い」を人の心に語っておられるということである。実は、そのおかげで人は思考ができ、周りの人とも関われるので、人が思考できること自体が、人の中心は神との関係であることを示している。そして、この神との関係が人との関係に投影されるので、例えば、神は人に「盗むな」と語るが、その言葉に耳を傾けるから、人は人と関わる際、人の物を盗まないようにすることができる。こうして、神との関係が人との関係に投影される。それゆえ神は、神を愛することを第一の戒めとし、人を愛することを第二の戒めとされたのである。したがって、「苦しみ」の解決は、神との関係を改善することでしか得られないというのが結論である（参考：キェルケゴール著『哲学的断片への結びの学問外れな後書』 ※通称は『後書』）。

では、どうすれば神との関係を改善できるのだろう。それはつまり、「苦しみ」の解決の話である。ここから、「苦しみ」の解決の本格的な話に移る。

－「苦しみ」の解決－

人の中心にあるのは神との関係であり、その関係が人との関係に投影されているので、「苦しみ」の真の原因は、神との関係が上手くいっていないことにある。では、神は人とどのような関係を築きたいのだろう。それは、父と子と聖霊が「一つ」であるように、人とも「一つ」の関係を築きたいと願っておられる。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」（ヨハネ 17:21　新共同訳）。平たく言えば、人を神の友と呼べる関係である。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。そこで、神は人が神に近づいてこられるように目的地の神を示し、人を後ろから目的地に向かって押してこられた。

しかし、「死」が入り込み、神との間に「隔ての壁」が出来たせいで、人は神に近づけなくなった。それが「苦しみ」の原点であり、その「苦しみ」が人との関係に投影されている。それゆえ、心を神に向け、神に近づくことでしか「苦しみ」は解決しない。とはいえ、「隔ての壁」がある以上、自力で神に近づくことはできない。それでも、神にあわれみを乞うことならできる。そこで、神はあわれみを乞う者を助け、引き寄せてくださる。ここに「苦しみ」の解決がある。したがって、「苦しみ」の解決は、人が神にあわれみを乞えるかどうかに懸かっている。それは、自分の「弱さ」を承認できれば可能になるので、そこから話を始めよう。

❖　自分の「弱さ」を承認する

「苦しみ」の解決は、自分の「弱さ」をどれだけ神の前で承認できるかに懸かっている。なぜなら、自分の「弱さ」を神の前で承認することが、そのまま神にあわれみを乞うことを意味するからである。神にあわれみを乞うた分だけ神に引き寄せられるので、それに伴い「平安」が増し加わり、「苦しみ」からは解放されていく。これが神の恵みであり、それは「弱さ」の承認のうちに完全に現れるのである。

> 「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。」
>
> （Ⅱコリント 12:9）

では、自分の「弱さ」とは何なのか。それは第一に、死ぬしかない「死の体」である。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ 7:24　新改訳 2017）。滅びる「死の体」でいる限り、滅びない

神とは断絶した状態である。その状態を「罪」という。それは、入り込んだ「死」が作り出した状態なので、聖書は、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）と教えている。この状態は「死の恐怖」を覚えさせるので、それを承認すれば、すなわち神にあわれみを乞えば、そこに神の恵みが完全に現れる。それは、神が人を「死」から「いのち」に移す恵みであり、これを「永遠のいのち」を持つという。「永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)。これが、『福音の回復』第一巻で述べた、福音の「第一ステージ」である。

ただし、「死の恐怖」の承認は、潜在意識での出来事になるので、「永遠のいのち」を持てるようになる恵みが現れても、本人は意識できない。意識できなくても、「永遠のいのち」を持ったなら、キリストについての御言葉を聞くことで、イエス・キリストを知るようになる。「永遠のいのちとは、(中略) イエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。イエス・キリストを知れば、今度は意識に於いて心を神に向け、神に引き寄せられていく段階に入る。この話は、『福音の回復』第一巻で述べた福音の「第二ステージ」の始まりに該当する。

そこで「弱さ」の第二番目は、神の命令に従えない自分である。それが、自分で意識できる「罪の行為」であり、神の前に自分の「罪の行為」を言い表すなら（承認するなら)、赦される恵みが完全に現れる。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ 1:9)。この恵みは意識できる「平安」に代弁されるので、この恵みを受け取ると意識に於いて神に感謝ができるようになり、神を愛せるようになる。そのため、多くの罪を認め、多くの罪が赦される経験をすれば、より多くの「平安」が意識でき、より多く神を愛せるようになる。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」(ルカ 7:47　新共同訳)。この神との関係が人との関係にも投影されるので、人も多く愛せるようになる。神がこれほどまで私を愛してくださったのだから、私も人を愛そうではないかとなり、互いに愛し合うことが可能となる。

> 「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」（Ⅰヨハネ 4:11）

具体的には、人から悪く言われても、裁かないで赦せるようになる。これが「弱さ」に働く神の恵みであり、この恵みが「苦しみ」から私たちを解放してくれる。この話

は、『福音の回復』第一巻で述べた福音の「第二ステージ」である。そして、福音の「第一ステージ」も「第二ステージ」も、自分の「弱さ」を知ることに懸かっているので、「弱さ」を知るように神が人を助ける作業が、福音の「第三ステージ」に該当する。

このように、「苦しみ」の解決は、自分の「弱さ」をどれだけ神の前で承認できるかに懸かっている。それは自分の「罪」を認める道であり、言い換えれば、それは自分の「限界」を知り、それを神の前で承認する道である。この承認が、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）という叫びであり、心を神に向ける行為である。すると、神がその人を引き寄せてくださるので、神との関係は改善へと向かい、「苦しみ」も解決へと向かう。そして、自分の「弱さ」を承認できるのは、「苦しみ」を覚えるからである。そういう意味では、「苦しみ」にこそ慰めがある。

❖ 「苦しみ」にこそ慰めがある

「苦しみ」を覚えなければ、人は自分の「弱さ」を承認できない。ならば、その「苦しみ」はどこから来たかといえば、神に近づきたくてもできないことから来た。しかし、その状態は心の谷底（潜在意識）での話なので、人は「苦しみ」を意識できない。そこで、神が代わりに人の「苦しみ」を負い、神の「苦しみ」として人に訴えるので、人は「苦しみ」を覚えることができる（本書 9 頁「神が覚える「苦しみ」」）。その際の神の訴えが「神の律法」（神の思い）である。というのも、人は律法に違反する度に「苦しみ」を覚え、否応なしに自分の「弱さ」を知ることができるからである。

> 「彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえするのです。」（ローマ 2:15　新改訳 2017）

この「苦しみ」によって、自分の「弱さ」を承認できれば、私たちはキリストへと導かれる。「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」（ガラテヤ 3:24）。まさしく「苦しみ」は、神から賜るのである。「キリストのための苦しみをも賜った」（ピリピ 1:29）。その「苦しみ」が、神にあわれみを乞う信仰を発芽させてくれるので、「苦しみ」にこそ、私たちの受ける神からの慰めがある。

> 「キリストの苦しみが私たちに満ち溢れているように、私たちの受ける慰めもキリストによって満ち溢れているからです。」
>
> （Ⅱコリント 1:5　聖書協会共同訳）

まことに人が覚える「苦しみ」には、私たちの受ける神からの慰めがある。なぜなら、「苦しみ」と真剣に向き合えば、自分の「弱さ」を神の前で承認できるようになり、それがそのまま神にあわれみを乞う信仰となって、「苦しみ」も解決へと向かうからである。そこで、イエスはこの解決の道を次のように言われた。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

イエスは、人が覚える「苦しみ」を「重荷を負っている人」と表現し、その「苦しみ」の先に解決があるので、「わたしのところに来なさい」と言われたのである。

要するに、人が覚える「苦しみ」には、神がご自分の「苦しみ」を以て処置されるのである。この「苦しみ」はマイナスの感情なので、それは「**－**」（マイナス）と表記できる。神はこの「**－**」に、「**－**」で対処するということである。なぜなら、「**－**」の「**－**」は「**＋**」になるからである（**－（－）＝＋**）。また、「苦しみ」は「**否定**」の感情なので、人が持つ「**否定**」の感情に対しては、神は「**否定**」を以て対処するということである。なぜなら、「**否定**」を「**否定**」することは「**肯定**」だからである。つまり、「苦しみ」に対しては、唯一「苦しみ」が有効となる。

そこで聖書は、「苦しみ」を意識させる「患難」に出遭ったなら喜べと教えている。というのも、「苦しみ」には「苦しみ」が有効であり、私たちを「肯定」に導くからである。それは、こうである。まず「患難」が自分の「弱さ」を認めさせ、心を神に向けさせる。すると、そこから神の約束を信じる忍耐が生み出され、忍耐が品性を生み、それが神への「希望」を生み出すのである。この「希望」が「肯定」であり、「苦しみ」の解決をもたらす。その「希望」は聖霊の助けによって、人の中心である神との関係が築かれたことで手にする「宝」なので、聖書はその様子を次のように綴っている。

> 「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:3-5）

ここで聖書は、「苦しみ」という「闇」の先には、「光」（希望）があることを教え、また、イエス・キリストというまことの「光」は、「闇」に輝くことを教えている。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」（ヨハネ 1:5　新改訳 2017）。つまり、「苦しみ」の中にあってこそ、人は神を呼び求めることができるのである。「私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた」（詩篇 18:6）。それは、「苦しみ」には「苦しみ」が対応するということである。

このように、「苦しみ」にこそ慰めがあるので、神の助けで「苦しみ」を覚えたなら、「苦しみ」から目を逸らしてはならない。そうすれば、いつも気になっていた人の声が、その「苦しみ」によってかき消され、ますます神の声が聞こえるようになり、絶望へと追い込まれていく。すると、自分の「弱さ」を承認でき、すなわち神にあわれみを乞うことができ、まことの「光」が見えてくる。ここに「苦しみ」の解決がある。大事なのは絶望する勇気である。こうして、人は知るようになる。「苦しみ」にこそ、神からの慰めがあることを。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」（詩篇 119:71）。この一連の有様が、人の中心となる神との関係が改善されていく有様であり、「苦しみ」の解決である。この有様を、神が人を高くするという。「自分を低くする者は高くされます」（マタイ 23:12）。「苦しみ」の解決は、まさしく「苦しみ」によって自分の「弱さ」を承認し、自分を低くすることにこそある。

❖　自分を低くする

自分の「弱さ」を神の前で承認することが、神にあわれみを乞う信仰であり、心を神に向ける行為である。「弱さ」を承認すれば、神との関係が改善されていく。そうなれば、ますます人は自分を低くするようになるので、神がその人を神の方へと引き上げてくださる（高くされる）。ここに、「苦しみ」の解決がある。そこでイエスは、このことを教えるための譬えを話された。

> 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。（中略）末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください』と言うでしょう。」（ルカ 14:8-10）

イエスはここで、婚礼に招かれたなら末席に着くようにと言われた。つまりそれは、自分の「弱さ」を承認し、自分を低くせよということである。そうすれば、招いてく

ださった神が来て、末席から上席に引き上げてくださるという。さらに、イエスは次の言葉で、この譬えを締め括られた。

> 「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 14:11）

これは、神の恵みが、「弱さのうちに完全に現れる」（Ⅱコリント 12:9）ということを示している。そして、イエスは続けて言われた。

> 「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。」（ルカ 14:12）

ここでイエスは、お返しをしてくれる相手は招待するなと言われた。これは、見返りを期待して人に良くするのはやめなさいということである。人は「友人、兄弟、親族、近所の金持ち」などに良くすることで、自分が良く思われるという見返りを期待し、自分を高くしてもらおうとするが、それはやめなさいということである。そのようなことをすれば、自分が高くされることに満足し、自分を低くすることができなくなり、人を高くされる神の恵みを受け取れなくなるからである。それは、神との関係が築けなくなるということである。そこでイエスは、自分の価値を高くしてくれる見返りなど全く期待できない人たちに良くするようにと、すなわち宴会に招待するようにと、言われたのであった。

> 「祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。」（ルカ 14:13-14）

イエスは、見返りを期待できない人たちの例として、「貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たち」を挙げられた。誰も彼らには振り向かないので、彼らはこの世界では誰の目にも留まらない、「最も小さい者たち」である。そのため、彼らに良くするということは、自分を低くすることの具現化になるので、そこでは神との関係が築かれる。それでイエスは、「最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」（マタイ 25:40）と言われたのである。こうして、自分を低くすることで神との関係が築かれていき、神への信仰、希望、愛という「宝」が天に蓄えられるこ

とになる。その「宝」は、復活して天の御国に入る時、神からのお返しとして受け取るので、イエスは先の話の続きで、「義人の復活のときお返しを受けるからです」（ルカ 14:14）と言われたのであった。

このように、「苦しみ」の解決は、「苦しみ」によって自分の「弱さ」を承認し、自分を低くすることにある。それは、「最も小さい者たち」に良くすることに具現化される。こうして、神との関係は改善されていく。というのも、神との関係は、「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」（ルカ 14:11）という関係だからである。それは、人の「弱さ」を神が贖う関係であり、「罪人」を「義人」にする関係であり、人への「否定」を「否定」する関係である。ここに「苦しみ」の解決がある。この解決を手にすると、すべての事が感謝できるようになる。「すべての事について、感謝しなさい」（Ⅰテサロニケ 5:18）。しかし、人には神が見えないので、誤った道を目指してしまう。それは、自分を高くする道である。そのような生き方をするようになったのは、「死」が入り込んだからである。そこで、その経緯を見ておくと、「苦しみ」の解決も包括的に理解できる。

❖ 誤った道を目指すようになった経緯

悪魔の仕業で人は罪を犯し、その罪に伴い「死」が入り、「罪によって死が入り」（ローマ 5:12）、人の体も世界も変化し続ける「有限性」になった。その結果、人には変化しない「永遠性」の神が見えなくなった。見えるのは、「有限性」の世界だけとなった。しかし、人の土台は神の「いのち」であり、その「いのち」である「魂」は神を慕い求め、「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2　新共同訳）、人を神の方向に押し続けるので、人は神が見えなくても神を求め続けるしかなかった。

それで、人は見えない神を見える「有限性」の世界に投影し、それを神として求めてしまう。その神は完全な方なので、人は「有限性」の世界に於ける完全を思い描き、それを理想とし、理想を神として求める。すると、この「有限性」の世界は変化し続ける世界なので、そこでの理想は様々な「可能性」となる。まさに「有限性」の世界は、「可能性」の世界である。そうなると、人は、どれを神として求めたらよいのかと「目まい」を覚え、不安に陥る。それでも「有限性」の世界に一歩踏み出し、そこにある「可能性」（理想）を神として求めるしかない。ここに、神を客観的に知り、神を自分の納得の下に置こうとする傲慢が始まった。

ところが、こうした「可能性」は所詮「神」ではなく偽物なので、神との距離は全く縮まらない。それゆえ、求めた「可能性」（理想）に到達しても、得られるのは肉の満足だけで、心の中は「**空の空**」（伝道者 1:2）である。すると、「有限性」の「可能性」を再び見て、どれを神として求めたらよいのかと「目まい」を覚え、再び不安に陥った。人はこれを繰り返す。見える世界の「可能性」に求める神を投影し、自分を幸せにしてくれる「青い鳥」として追い続ける。これが見果てぬ夢となって、人を惑わし続けている。こうした生き方が人の有様であり、「罪の有様」である。それは、人が誤った道を目指す姿にほかならない（参考：キェルケゴール著『不安の概念』）。

そもそも、神はいつも同じであって、変化しない不動な方なので、「**イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです**」（ヘブル 13:8）、それを変化し続ける世界に投影すること自体が誤りである。変化しない神を、変化する「可能性」に置換することなど不可能であるが、入り込んだ「死」のせいで、人は変化する「可能性」に神を置換し、それを求めるしかないのである。これを、「死」の**牢獄**に閉じ込められたという（本書 13 頁「心を神に向ける」）。

このように、入り込んだ「死」によって人の目は神が見えなくなった。しかし、人は神が「**見える**」と言い、神を見える「可能性」に置換し、それを求めてしまう。ここに「罪」があるので、イエスはこうした様を、「**今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る**」（ヨハネ 9:41）と言われた。この「罪」の状態が「**苦しみ**」であり、それは本物の神と関われないことで生じている。ゆえに、「**苦しみ**」の解決は、本物の神と関われるようになるしかない。だが、人は偽物の神と関わろうとする。それが「罪の有様」である。そこで今度は、「罪の有様」の本質を見ておきたい。それも、「**苦しみ**」の解決を理解する上では重要である。

❖ 「罪の有様」の本質

人は「罪の有様」と聞くと、道徳に反する行為を思い浮かべる。無論、それも「罪の有様」ではあるが、「罪の有様」の本質ではない。本質は、神との関係を二の次にし、見える世界と自分との関係の向上を目指すことである。神との関係を置き去りにし、人との関係に精を出すことである。簡単に言うと、人から良く思われることを第一にすることである。神が自分のことをどう思っているかはどうでもよく、周りの人が自分のことをどう思っているかを大切にすることである。難しく言えば、神との関係の中で自分を知ろうとするのではなく、人との関係の中で自分を知ろうとすることである。なぜこれが「罪の有様」の本質かと言えば、人は神の友と呼ばれるように造られ、

神と共に生きるように造られたからである。人となって来られた神が**インマヌエル**という名で呼ばれるのも、そのためである。「**訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である**」（マタイ 1:23）。ゆえに、神との関係を二の次にする生き方が「罪の有様」の本質であり、これが「**苦しみ**」の真の原因である。

さらに言えば、人は、本体の体と一対一で関わっている器官であるから、「**ひとりひとりは各器官なのです**」（Ｉコリント 12:27）、人の中心となる神との関係を置き去りにし、すなわち本体の体との関係を無視し、人との関係に精を出すことが「罪の有様」の本質となる。つまり、人は神の前では一人であって、自分の前にも神しかおられない「単独者」なので、神との関係を二の次にする生き方が「罪の有様」の本質となる。これが「**苦しみ**」の真の原因になっている。

そこで、神はご自分と人との関係が上手くいっていないことで生じる人の「**苦しみ**」をご自分が負い、それを人に、「**あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている**」（マタイ 16:23）と訴える。人は神との関係を築けなくなった「**苦しみ**」に気づかないので、神はそれを自らの「**苦しみ**」として負い、神の律法を使って人に訴える。人はその訴えを見える困難に投影し、「**苦しみ**」として感じ取っている（本書 7 頁「見える困難に「苦しみ」を覚えるメカニズム」）。

このように、「罪の有様」の本質は、神のことを思わないで、人のことを思ってしまうことである。人との関係の中で、自分を知ろうとすることである。そのため、神との関係を築こうとはしない。その具現化が、様々な言い訳をし、神との関わりを避けることである。神を礼拝することよりも、この世の用事を優先させることである。これが「罪の有様」の本質であり、それがそのまま「**苦しみ**」の原因である。この「罪の有様」の本質が分かれば、「**苦しみ**」の解決は、神との関係を築くこと以外に、すなわち神との関係の中で自分を知ること以外に、あり得ないことがよく分かるのである。

だが、人は「**苦しみ**」の原因は人との関係にあると思うので、人から良く思われる関係を築くことで「**苦しみ**」を解決しようとする。あくまでも、人との関係の中で自分を知ろうとする。この生き方を「**肉に属する人**」と呼ぶ。そこで、「**肉に属する人**」についても見ておきたい。そうすれば、「**苦しみ**」の解決がどこにあるのかが、別の視点からも分かるようになる。

❖ 「肉に属する人」

パウロは、神との関係の中で自分を知ろうとする人を「御霊に属する人」と呼び、人との関係の中で自分を知ろうとする人を「肉に属する人」と呼んだ。

> 「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。」（Ⅰコリント 3:1）

「肉に属する人」は、神との関係の中で自分を知ろうとはしないので、「神の言葉」を聞いても聞き流してしまう。そうなると、「神の言葉」は噛まなくてよい（従わなくてよい）、「乳」にしかならない。それに対し、「御霊に属する人」は神との関係の中で自分を知ろうとするので、「神の言葉」を聞くと従おうとする。その場合、「神の言葉」は噛む必要のある「堅い食物」になる。そこでパウロは、「神の言葉」をいくら語っても、それは「肉に属する人」には「乳」にしかならないので、彼らには「乳」を与え、「堅い食物」を与えなかったという言い方をした。

> 「私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」
>
> （Ⅰコリント 3:2）

そしてパウロは、自分が「肉に属する人」なのかどうかを知るには、「ねたみや争い」があるかどうかで分かるとした。というのも、「肉に属する人」は人との関係の中で自分を知ろうとするので、そこでは「ねたみや争い」が絶えないからである。当たり前のように互いを比べ、誰が偉いかを巡って争うことが日常茶飯事である。これこそが、キリストを持たない、ただの人の歩みなので、パウロは次のように言った。

> 「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」
>
> （Ⅰコリント 3:3）

また、「肉に属する人」は、人との関係の中で自分を知ろうとするので仲間作りに精を出す。ある人は「私はパウロにつく」と言い、パウロによって自分の価値を引き上げようとする。すると互いを比べるので、別の人は「私はアポロにつく」と言い、アポ

ロによって自分の価値を引き上げようとする。こうして、付いたり離れたりを繰り返しながら、すなわち仲間作りに精を出しながら、人との関係の中で自分を知ろうとする。それこそがキリストを持たない、ただの人の歩みなので、パウロはこう言った。

> 「ある人が、「私はパウロにつく」と言えば、別の人は、「私はアポロに」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。」
> （Ｉコリント 3:4）

確かに、見た目はアポロもパウロも、神の権威を託された人ではあったが、「神」ではない。ただ、神への信仰を手引きしただけである。そこで、パウロは言った。

> 「アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。」（Ｉコリント 3:5）

パウロは、自分はただ「神の言葉」を蒔き、アポロがそれを信じるように励ましただけで、人々を成長させたのは神であると言った。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です」（Ｉコリント 3:6）。もちろん、人の中心は神なので、神だけが人を成長させることができる。そして、大切なのは、成長させてくれる神との関わりなので、パウロは、「それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです」（Ｉコリント 3:7）と言った。パウロもアポロも神の協力者にすぎず、大切なのは神との関係であり、言ってみれば、人は「神の畑」であり、「神の建物」であると、パウロは言った。

> 「私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。」
> （Ｉコリント 3:9）

これこそが、パウロの言いたかったことである。いや、パウロを通して神が伝えたかったことである。それは、人は「人の畑」ではなく、「神の畑」である、ということである。これは、人の中心は、人との関係を持つ場所ではなく、神との関係を持つ場所であり、神が人を耕し、人を育て、人から神への愛を収穫する場所であることを意味する。言い換えれば、人は「人の建物」ではなく、「神の建物」だということである。「神の建物」ということは、それは神が土台を据え、神が建てる場所ということである。そこで、神は人と暮らす「神の神殿」を建てられる。「あなたがたがその神殿です」

（Ⅰコリント 13:17）。それは、人が神との関係を築くことで得られる、神への信仰、希望、愛で建てられていき、いつまでも残る。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です」（Ⅰコリント 13:13）。これが天に蓄えられる宝になる。それで、イエスは地上に宝を蓄えるのはやめ、天に宝を蓄えなさいと言われた。

> 「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。」（マタイ 6:19-20　新改訳 2017）

まさに人は「神の畑」であり、「神の建物」なのである。それは、神が人との関係を築く場所である。神が人を育て、人に神への信仰、希望、愛という宝を持てるようにする場所である。人は、神による宝を手にすることで、自分の「真実な姿」を知るようになる。それは、神に真剣に愛されている「神の子」の姿である。

> 「私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどれほどの愛を私たちにお与えくださったか、考えてみなさい。事実、私たちは神の子どもなのです。」
> （Ⅰヨハネ 3:1　新改訳 2017）

「神の子」としての自分を知ることにこそ、すなわち神の目には高価で尊い自分を知ることにこそ、「わたしの目には、あなたは高価で尊い」（イザヤ 43:4）、「苦しみ」の真の解決がある。つまり、「苦しみ」の解決は、「神の畑」となり、神との関係の中で自分を知ろうとする生き方にこそある。「苦しみ」の解決は、神に目を向け、神が建てる「神の建物」となり、そこで神との関係が築かれていくことにこそある。

このように、「罪の有様」の本質は、人との関係の中で自分を知ろうとすることであり、聖書はそれを「肉に属する人」と呼ぶ。この生き方には「苦しみ」の解決はないので、神との関係の中で自分を知ろうとする、「御霊に属する人」を目指すようにと、聖書は教えている。そもそも、人は「人の畑」ではなく、「神の畑」であり、「神の建物」なので、そうすべきであることを聖書は教えている。つまり、人は神のものであって、神の友と呼ばれる関係を築いていくために造られた。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。

そこでイエスは、「不正の富」で友をつくれと言われた。「不正の富」とは「この世での時間」であり、その時間を、神の友と呼ばれる関係を築くこと使えと言われた。そ

のためには、「小さい事」に忠実である必要があることを教えられた。それこそが、「苦しみ」の解決に至る具体的なプロセスである。神の友と呼ばれる関係を築いていく、具体的な道筋であり、それを知ることが「苦しみ」の解決の最後の話になる。そこで、話のタイトルは“「不正の富」で友をつくれ”である。これは丁寧に話をする。

❖ 「不正の富」で友をつくれ

イエスは弟子たちに、不正な管理人の譬えを話された（ルカ 16:1-13）。これは、主人の財産を任されていた管理人が財産を乱費し、そのことがばれそうになると、仕事がクビになることに備えて不正を行なったという話である。その不正は、主人の債務者たち一人一人を呼んで、債務の内訳を少なく書き換えさせたことであった。そうしておけば、仕事がクビになっても、彼らは自分の家に自分を迎えてくれるに違いないと考えたのである。主人は、彼がこうも抜け目なくやったことを逆にほめたという。この話は、自分に任されてるものを上手く使って、自分が困ったときの避難場所となる「友」をつくっておいたということである。そして、イエスは次のことを言われた。

> 「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」（ルカ 16:9）

では、自分に任されている「不正の富」とは何を指すのだろう。不正とは、神から見て正しくないことであり、それは「死」を指す。なぜなら、神は「いのち」なので、それを否定する「死」は、神から見て不正となるからである。その「死」の具現化が、終わりに向かって刻み続ける「時間」である。誰もが、この世で生きられる「時間」を自由にしてよいと、主人から任されている。そのおかげで、自分の可能性を追求できる。ある者は金持ちの可能性を追求でき、ある者は賞賛の可能性を追求でき、ある者は快楽の可能性を追求できる。そうした追求が自分の「富」となるので、任された「時間」は「富」を生む。つまり、「不正の富」とは、主人から、各人に任された「この世での時間」を指す。

ただし、この世での「時間」は「死」の具現化なので、それを各人に任せた主人は神ではなく、悪魔である。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。悪魔が蛇を使って人を欺いて罪を犯させ、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）、その罪に伴い「死」が入り込み、その「死」が全人類に広がり、「ひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に

広がった」（ローマ 5:12）、終わりのなかった「時間」が、終わりのある「時間」になった。それゆえ、「不正の富」を任せた者は悪魔であり、それは「他人のもの」である。

では、「自分のために友（複数形）をつくりなさい」の「友」とは誰を指すのだろう。イエスによると、友となった「彼ら」は、自分の「富（不正の富）がなくなったとき」に、「永遠の住まいに迎える」という。「不正の富」は「この世での時間」を指すので、「富がなくなったとき」とは「この世での時間」を全て使い果たしたときであり、「肉体の死」を指す。すると、「彼ら」が自分を「永遠の住まいに迎える」という。「永遠の住まい」とは天の御国を指すので、そこに自分を迎えることができるのは三位一体の神しかおられない。よって、「彼ら」とは、「父」、「子」、「聖霊」を指す。イエスが言われた「友」とは、人ではなく、「神」なのである。

したがって、イエスが弟子たちに、すなわちキリスト者に言われたことの意味は、自分に任されている「この世での時間」を上手く使って、神と「友」の関係を築きなさいということである。そうすれば、「友」として、天の御国に迎えられるからということである。そうでないと、ただ迎えられるだけになる。それでも感謝ではあるが、せっかくであれば、「友」として迎えられるように、「この世での時間」を上手く使いなさいということである。

ところで、聖書は、「この世での時間」を上手く使った人の例としてアブラハムを挙げている。彼は、「神の言葉」には「小さい事」でも忠実に従い、「この世での時間」を神との関係を築くことを第一として使い、神の友と呼ばれるまでになったという。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。このアブラハムの例からも分かるように、「不正の富」で自分のために友をつくるには、「小さい事」に忠実である必要がある。それで、イエスは「不正の富」の具体的な話として、次のことを言われた。

> 「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。」（ルカ 16:10）

「この世での時間」を上手く使って、神と「友」の関係を築くには、「小さい事」に忠実でなければならないということである。それこそが、「苦しみ」の解決に至る具体的なプロセスである。では、「小さい事」とは何か。

✞ 第一に礼拝を守ることである。一週間は 168 時間あるが、その時間に対して日曜日の礼拝の時間が 2 時間だとすれば、礼拝は一週間の時間からすればわずかな時間であって「小さい事」である。

✞ 第二に、献金を捧げることである。献金は収入の十分の一でよく、十分の九は自由にしてかまわないのだから、これも「小さい事」である。

✞ 第三に、感謝することである。食事の感謝、一日の感謝、何事に於いても感謝することである。つまり、全てのことを感謝するのである。この感謝の祈りに使われる時間は、一日の時間の中ではわずかなので、これも「小さい事」である。

こうした「小さい事」は、周りと自分を比べないで、神だけを見る訓練になる。特に、全てのことを感謝することは、まさしく神の前に一人で生きる「単独者」であることの訓練になる。そこで、「小さい事」を積み上げていくと、「大きい事にも忠実」になれるとイエスは言われた。これは、神と「友」の関係を築いていくことができるということである。それはまさしく、「小さい事」に忠実であることから始まるのである。そして、イエスは続けて次のように言われた。

> 「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。」
> （ルカ 16:11-12）

ここでイエスは、「不正の富」を、「他人のもの」と言い換えられた。それは、先述したように、「不正の富」は悪魔が人に任せた「時間」であって、神が人に持たせた「時間」ではないからである。そして、「不正の富」に忠実でなかったなら、誰が「まことの富を任せるでしょう」と言うことで、「不正の富」に忠実であれば、すなわち「この世での時間」を上手く使い、神が言われる「小さい事」に忠実であれば、「まことの富」を任せることをイエスは強調された。「まことの富」とは、言うまでもなく神のことであり、神がご自分を人に「任せる」ようになるというということである。これは、神と人の間に、「友」としての関係が築けるようになることを述べている。

さらにイエスは、これを、「あなたがたのものを持たせるでしょう」と、言い換えられた。「あなたがたのもの」とは、人がもともと持っている人の土台であり、それは神で

ある。その神が、アダムの罪に伴い入り込んだ「死」によって、アダム以降は見えなくなり、神を持っていることは知られざる富になった。しかし、「小さい事」に忠実に生きれば、神と「友」の関係を築いていくことができるので、「まことの富」の神にも気づけるようになる。それで、イエスは「あなたがたのものを持たせるでしょう」と言われたのである。この「まことの富」である神については、イエスは放蕩息子の譬えでも話しておられる。それは、兄に対して父が言った言葉に表れている。

> 「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』」（ルカ 15:31）

この兄は、弟と自分を比べることで自分の価値を知ろうとし、自分の努力で自分の富を築こうとしていた。そのため、自分が持っていた「まことの富」である神に気づけなかった。そこで、神である父が、「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ」と言ったのである。この譬えの続きが、不正な管理人の譬えであり、そこではどうすれば「まことの富」に気づけるようになるかを、イエスは教えられた。それは、「小さい事」に忠実であることであった。この兄は、全てのことを感謝するという「小さい事」に忠実ではなかったために、弟と自分を比べることで自分の価値を知ろうとする誘惑に負け、初めから持っていた「まことの富」にも気づけなかった。このように、神から言われた「小さい事」に忠実に生きることで、神と「友」の関係を築いていくことができるので、そこに「苦しみ」の解決がある。

つまり、自分の「弱さ」を知り、神にあわれみを乞うことができ、キリストを知るようなったのなら、神から言われた「小さい事」に忠実に生きていくのである。そうすれば、ますます人は自分の「弱さ」を知るようになり、神を必要とする自分に気づくことができ、それが神と「友」の関係を築いていくことにつながっていく。それはそのまま、自分の「真実な姿」を知るようになることを意味し、その姿とは、神の前では一人であり、神に無条件で愛されている姿にほかならない。なぜ、神の前では一人なのかというと、各人は一つしかない、神の体の大切な器官だからである。それを知ることが「苦しみ」の解決になる（本書 33 頁「体と器官との関係」）。そしてイエスは、見てきた不正な管理人の譬えにまつわる話を、次のように締め括られた。

> 「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」（ルカ 16:13）

イエスは、「ふたりの主人に仕えることはできません」と言われた。イエスによると、主人の一人は神であり、もう一人は富である。神に仕えるとは、神から言われた「小さい事」に忠実に生きることであり、それによって神と「友」の関係を築いていくことである。それはそのまま、神との関係の中で自分を知ろうとすることを意味する。それに対し、富に仕えるとは、人から言われた「小さい事」に忠実に生きることであり、それによってこの世の富、すなわち人から良く思われる賞賛の獲得を目指すことである。それはそのまま、人との関係の中で自分を知ろうとすることを意味する。

ここでイエスは、この二人の主人に仕えることはできないと言われたのである。それは、それぞれの主人があなたに違うことを言うからである。神があなたのことを「良き者」と言っても、人はあなたのことを「ダメな者」と言う。どちらか一方しか人は信じることができないので、「良き者」を自分として信じれば「平安」になるが、「ダメな者」を自分として信じれば「苦しみ」を覚えることになるので、「ふたりの主人に仕えることはできません」と、イエスは言われたのであった。したがって、「苦しみ」を解決したければ、富に仕えることをやめなければならないということである。先述した話に重ねると、「肉に属する人」の生き方をやめ、「御霊に属する人」の生き方を目指すということである（本書 49 頁「肉に属する人」）。

このように、「苦しみ」の解決は、「不正の富」で自分のための「友」をつくることにこそある。それは、「この世での時間」を神との関係を築くことに使い、神の友と呼ばれることを目指すということである。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。神との関係を築くことで実る、神への信仰、希望、愛を収穫するということである。それだけが、いつまでも残る宝となり、この宝が「苦しみ」の解決となる（本書 31 頁「建物の話」）。なぜなら、人が覚える「苦しみ」の真の原因は、見えるところの困難にあるのではなく、神との関係が上手くいっていないことにあるからである。

そして、神との関係を上手く築くには、兎に角、心を神に向けることから始めなければならない。そこでイエスは、まずは「小さい事」に忠実であれと言われたのである。それは、「神の言葉」に従ってみなさいということであり、そうすれば次第に「神の言葉」には従えない自分の「弱さ」に気づけるようになり、絶望に追い込まれ、神にあわれみを乞うことができるようになるからである。「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」（ガラテヤ 3:24）。神にあわれみを乞うとき、それは神なしでは生きられない自分を知った瞬間であり、この体験を繰り返

すことで、神との関係が築かれていき、神の友と呼ばれるようになっていく。ここに、「苦しみ」の真の解決がある。

以上が、「苦しみ」と「苦しみ」の解決の話であるが、神の思いが綴られた聖書は、一貫して同じことを問うている。それは、あなたは「この世での時間」を何のために使うかである。人との関係の中で自分を知るために使うのか、それとも、神との関係の中で自分を知るために使うのかである。何も残らない見せかけの富を得るために使うのか、それとも、いつまでも残る宝を天に蓄えるために使うのかである。それでイエスは、あの不正な管理人のように、賢く「この世での時間」を使い、いつまでも残る宝を天に蓄えなさいと言われたのであった。それは言い換えれば、「神の言葉」を信じる決断を迫っているということである。聖書の言葉は神からの告知であり、それは信じるかどうかの決断を、信じて従うかどうかの決断を迫っているのであって、それは「堅い食物」である。つまり、「苦しみ」を解決する「神の福音」は、聖書の言葉を信じる「信仰」から、「信仰」へと進ませるのである。

> 「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。
> 「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」
>
> （ローマ 1:17　新改訳 2017）

そこで最後は、『福音の回復』第一巻で述べた、「神の福音」の視点から、「苦しみ」と「苦しみ」の解決の話を総括したい。

－「神の福音」の視点からの総括－

「神の福音」は、人が抱えている問題を神が解決してくれる話である。その問題は二つある。一つは、この体のままでは滅ぶしかないことである。これは「究極の問題」であり、その解決は心を神に向け、神と和解することでしか得られない。これを「永遠のいのち」を得るという。もう一つは、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」が見えないことである。それが見えないために、人との関係の中で自分を知ろうとし、「ねたみや争い」に走ってしまう。ここに「現実の問題」があり、その解決は心を神に向け、和解した神との関係を築いていくことにある。これを、得た「永遠のいのち」を豊かにするという。ここに、「苦しみ」の解決がある。

そこで、「神の福音」の順序は、神と和解させ、「永遠のいのち」を得させることから始まり、和解した神との関係を築き、得た「永遠のいのち」を豊かにしていくことを目指す。どちらも、心を神に向けなければならないので、神は裏で、人が心を神に向けられるように呼びかける。ここにも「神の福音」がある。したがって、「神の福音」は「三つのステージ」に分けられるので、その話から始めたい。

❖ 福音の「三つのステージ」

福音の「第一ステージ」は、人が神の呼びかけに応答することで「永遠のいのち」が与えられ、「死」から「いのち」に移されるステージであり（神との和解）、これを「救い」という。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

この「第一ステージ」の「救い」で大事なことは、人は神と一対一で向き合って生きている「単独者」なので、人を救うのは神であるということである。ただし、救われて「永遠のいのち」を持っても、救いに関する神とのやり取りは潜在意識での出来事になるので、救われても自覚がない。そこで次に、救いを自覚し、神との関係を築いていく福音の「第二ステージ」が必要になる。それは、次のような流れになる。

救われた者は「永遠のいのち」を持つので、キリストについての御言葉を聞けばキリストへの信仰が芽生え、「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについて

のみことばによるのです」(ローマ 10:7)、イエス・キリストを信じられるようになる。「永遠のいのちとは、(中略) イエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。それにより、救いの自覚に至る。つまり、人の中心である神との関係を、キリストについての御言葉を聞くという周りとの関わりの中で知るようになる。これは、神との関係がこの世界に投影されるからである。それで聖書は、「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(ローマ 1:20　新共同訳) と教えている。

そして、救いの自覚に至ったなら、そこから神との関係を築いていく作業が始まり、その中で、自分がどれだけ神に愛されているかを知るようになる。それに伴い、「苦しみ」から解放されていく。これを、与えられた「永遠のいのち」が豊かになっていくという。ここまでの流れが福音の「第二ステージ」になる。

このように、「第一ステージ」も「第二ステージ」も、それは神の呼びかけに応答しなければ始まらないので、人が応答できるように、聖霊が人を絶望に追い込んでいく裏のステージがある。それが、福音の「第三ステージ」である。神の呼びかけに応答する「信仰」を、生起させるステージである。以上の「三つのステージ」が、『福音の回復』第一巻で述べた「神の福音」になる。そこで今度は、それと見てきた「苦しみ」の解決の話を重ねてみたい。

❖ 「三つのステージ」に「苦しみ」の解決を重ねる

最初に、福音の「第三ステージ」である。それは神が人を絶望に追い込み、人の中に神への「信仰」を生起させる話であったが、それに該当するのが、ここで見てきた、人を動かす聖霊の風である。聖霊の風は神の「苦しみ」を人に訴え、人を絶望に追い込むからである。そのおかげで、人の中に神にあわれみを乞う「信仰」が生起するので、見てきた人を動かす聖霊の風の働きは、福音の「第三ステージ」である (本書 6 頁「「苦しみ」の真の原因」)。

そして、「信仰」が生起する中、その「信仰」を選択すれば神に引き寄せられる。その最初で、人は神と和解し、「永遠のいのち」を得る。これが福音の「第一ステージ」である。ところが、一旦神と和解しても、人は「死」の世界で暮らしているので、再び「肉の声」に惑わされ、心を神に向けられなくなってしまい、「苦しみ」を覚える。すると、神は再び人の「苦しみ」を負い、人に訴え、人を絶望に追い込むので、そのおかげで再び神にあわれみを乞う「信仰」が生起する。これが、心を神に向けられなく

なる度に起きるので、その度に神にあわれみを乞う「信仰」を選択できれば、罪が赦される体験を多くすることができ、多く神を愛せるようになっていく。「赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（ルカ 7:47　新共同訳）。これが福音の「第二ステージ」であり、この福音に「苦しみ」の解決がある。その福音を一言でいえば、「赦しの恵み」である。この「赦しの恵み」に与かることが、「苦しみ」の解決となる（本書 16 頁「神が人を引き寄せてくださる」）。

このように、人が覚える「苦しみ」が、「苦しみ」の解決をもたらす「神の福音」の入口になる。したがって、「神の福音」は、キリストを信じる「信仰」だけでなく、そこでは「苦しみ」をも賜っている。「キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです」（ピリピ 1:29）。なぜなら、「苦しみ」は人に対し、「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」（詩篇 119:71）と言えるようにするからである。パウロも、病気の「苦しみ」を覚えたことで自分の「弱さ」に働く神の恵みを知り、神との関係を深く築くことができ、その喜びを告白した。

> 「私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています（苦しみに感謝している）。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」（Ⅱコリント 12:10　※（　）は筆者が意味を補足）

つまり、「苦しみ」に対して「苦しみ」を以て対処することで、「苦しみ」は「平安」になるということである。「苦しみ」は「**否定**」の感情なので、神は人が持つ「**否定**」に対しては、神の「**否定**」で対処するということである。それは、「**否定**」の「**否定**」は「**肯定**」だからである。したがって、「苦しみ」に対しては、唯一「苦しみ」が有効なのである。そこで、「神の福音」を一言で言い表すなら、それは「**否定**」の「**否定**」ということになる。であれば、「苦しみ」にこそ慰めがあるということになる（本書 42 頁「「苦しみ」にこそ慰めがある」）。

> 「キリストの苦しみが私たちに満ち溢れているように、私たちの受ける慰めもキリストによって満ち溢れているからです。」
>
> （Ⅱコリント 1:5　聖書協会共同訳）

こうした神とのやり取りの全てが、人は神の前で生きる「単独者」であることを前提にしている（本書 25 頁「人は「単独者」である」）。

まことに、「神の福音」は、人が神からの「心の声」を聞き、神の「苦しみ」を覚えることから始まる。「苦しみ」を覚えて絶望に追い込まれれば、神にあわれみを乞う機会が訪れるからである。その機会を生かし、神にあわれみを乞うなら、すなわち心を神に向けるなら、神が人を引き寄せてくださる。人の土台の神に目を向けさせ、土台の神に愛されている自分に気づかせてくれる。これを、神との関係を築くという。この作業が神の「苦しみ」を覚える度に繰り返され、神との関係はますます築かれていき、人が意識できなかった自分の「苦しみ」は解決へと向かい、神と人を愛せるようになっていく。この「苦しみ」の解決が「神の福音」である。

間違っても、「苦しみ」の解決は、見える困難の解決にあるのではない。人との関係を改善することにあるのではない。人との関係は、神との関係が投影されているだけだからである。したがって、全ては神との関係を築くことに懸かっている。そこでイエスは、神との関係を築く上での鍵となる、神の「苦しみ」を覚えたければ、兎に角、神が言われた「小さい事」に忠実に生きるようにと、アドバイスをされたのであった。

❖ あとがき

以上が、「苦しみ」と「苦しみ」の解決の話であり、この話がそのまま、「神の福音」の真実である。「神の福音」というと、従来は「義認」、「聖化」、「栄化」という分類で語られてきたため、身近には感じなかったかもしれない。だが、それは「苦しみ」の解決の話であって、神があなたに「苦しみ」の真の解決を与える話である。神は、あなたを友と呼ぶようにするという話である。

そこで、ここでは、『福音の回復』第一巻で述べた「神の福音」の真実を、「苦しみ」と「苦しみ」の解決という視点で見てきた。実は、『福音の回復』第二巻では、ここで試みたように、第一巻で述べた「神の福音」の真実を身近な視点で見ていく。そうしたことから、「苦しみ」と「苦しみ」の解決を、第一巻と第二巻のつなぎとして書いた。